

2011  
December

12月

高校版  
Volume

5

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

先輩から受け継いだ「技」と「思い」を次代へつなぐ  
東京都・私立國學院大學久我山中学・高校◎三戸治彦

## 4 特集

高校間連携で  
「学校力」を高める

- 6 対談 「自立型連携」で学校力を底上げし、  
地方から日本を活性化する  
広島県立安古市高校教頭◎小路口真理美 / 鹿児島県立川内高校教頭◎藤崎恭一
- 10 事例① 福井県・嶺南地域の高校間連携  
各校が自校の強みを生かして連携事業全体に貢献
- 13 事例② 広島県トップリーダーハイスクール支援事業  
高校間で切磋琢磨し、連携で学んだ指導を自校の力とする

## 16 指導変革の軌跡

- 16 石川県立小松高校  
進路指導体制の組織化◎組織力を生かした「小松メソッド」で生徒の力を伸ばす
- 20 福岡県・私立福岡雙葉中学・高校  
進学実績向上◎「志」を重視する教育で基礎学力の定着と進路意識の向上を図る
- 24 岡山県立矢掛高校  
学校改革◎生徒・教師の意識を改革、「やかげ学」を軸に学校の特色化を図る

## 28 30代教師の「転んでも起きる！」

「分かりやすい授業」を超え、「生徒がもっと学びたくなる」授業へ  
石川県立金沢桜丘高校◎前田昌寛

## 30 生きたデータの徹底活用

中だるみの2年生から学校を支える2年生へ

## 34 未来をつくる大学の研究室

「有機」をキーワードに太陽電池や液晶の新しい利用法を研究  
大阪大大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻 尾崎雅則研究室

## 38 新課程への助走

新課程移行期の課題と実践 —大阪府立吹田東高校の事例から—

## 42 大学選択 新たな視点

初年次に将来の見通しを示し、学ぶ意欲を引き出す大学・学部

## 48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは  
すべて取材時のものです。  
本文中、敬称略。  
本誌記載の記事、写真の無断複写、  
複製および転載を禁じます。

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同

<http://benesse.jp/berd/> 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます



左 いまい・ひろと 数学科。國學院大學久我山中学・高校に36年間勤務。同校の卒業生でもある。

撮影◎國學院大學久我山中学・高校にて

右 みと・はるひこ 数学科。初任以来、國學院大學久我山中学・高校に勤務。今年度で勤続25年。



きつと今井先生もそれが狙いで、私を合宿に連れ出したのだと思います。

こうした1、2年目の経験が、今でも私の糧になっています。

**悔しいけれど似てしまう**

あれから25年が経ち、今井先生は教頭になり、私は学年主任を担当するようになりました。今では私が若い先生方をまとめ

ていかなくはならない立場になつたわけですが、心掛けているのは先生方が気持ち良く仕事を出来るように、先生方の思いをくみ取り、それを上にしつかりと伝えていくことです。

実はこれも今井先生から学んだことです。先生が学年主任や学科主任(\*)を務めていた時、私たちの思いを代弁して、管理職に直言してくださいました。

とが何度もありました。「当時の私は今井先生に守られていたんだな」と感じますし、今度は私が同様な役割を果たす番だと思えます。そう考えると、私は

ずつと今井先生をモデルにしなから、走り続けてきたように思います。ですから私が何かする時には、どうしても今井先生のスタイルと似てしまうんですね。悔しいんですけど(笑)。

今は「技は見て盗め」というやり方ではなく、口で言わないと分かってもらえない部分も多いのですが、私が今井先生から見て盗みながら育ってきたように、若い先生方にも見て感じて欲しい、つかんで欲しいと思います。私が先生から学んだことを、少しでも次の世代にバトンタッチすることが出来たらうれしいですね。

が新人の時から合宿に連れて行かれて、理系クラスの3年生を相手に数学を教えることで鍛えられたからです。

私は、将来学校の中心として活躍して欲しい若い教師に対しては、学年主任や学科主任である先輩の教師が、責任ある仕事を与えることが大切だと思っています。

例えば一般に3年生の担任は、受験への対応からベテラン教師を配置しがります。しかし本来であれば「高校卒業時には生徒をここのまで引張り上げることが求められる」という出口をイメージできない教師が、入り口にあたる高1生(中高一貫校である本校の場合は中1生)を指導できるわけがありません。

もちろん管理職からは「この先生は、3年生を受け持つには若すぎるのではないか」という不安の声が出てきます。でもそこは「大丈夫です。彼はやってくれます」と踏みとどまる。そして学年主任として、何があっても若い担任を支える覚悟を持つのです。

先輩は後輩に場を与え、後輩は先輩の姿を見て学ぶ。そういう環境の中で、若い人たちは育っていくものだと思います。

\*同校では教科主任を「学科主任」と呼ぶ。

# 高校間連携で

# 学校力を高める

学校の小規模化などによって、以前よりも生徒同士が切磋琢磨し成長する機会が減り、教師が同僚から指導力向上のヒントを得にくくなっている。

これまで一つの解決策として、本誌では「高校間連携」の事例を紹介してきた。

今号では、学校の課題を解決し、活性化するための手段としての高校間連携の可能性と、連携を進める上でのポイントを考えていきたい。

## 高校間連携の 必要性を感じている 先生方の声

● 地方ではトップ校以外は進路指導の方法についての情報が不足がちだ。教師が他校から情報と刺激を受けて常に新しい視点で指導に当たることが大切だ。 静岡県

● 全国で学校の枠を超えて、教師という「資源」を共有資源として活用していく発想は、地域を育てる視点だと思っている。 長崎県

● 最近あちこちで他校とのネットワークづくりの動きが出ている。特に公立高校では、学校単位だけでなく、ネットワークの中から知恵を出し合い、高まっていく必要がある。 埼玉県

● 中学生の人数が減少している地方郡部では、生徒を取り合うのではなく、協力して地域の生徒を育てる姿勢が必要だと思う。 千葉県

VIEW21 高校版読者モニターアンケート結果より

対談

# 1 なぜ今、高校間連携が必要なのか？

広島県立安古市高校教頭 やすふるいち  
小路口真理美 しょうじくち × 鹿児島県立川内高校教頭 せんだい  
藤崎恭一

[P.6]

社会的背景

- 地方で人口が減少
  - 特に郡部の学校の小規模化
  - 教師の年齢構成のいびつ化
- など

教育現場の抱える課題

「学校力」の低下  
生徒  
教師

- 切磋琢磨する機会の減少により、学力や志望が高まりにくい
- 同質な仲間との交流が中心となり、価値観が広がらない
- 多様な体験の不足から進路観が育ちにくい
- 指導継承の場が減少し、指導力を高めにくい
- 同僚との交流の場の減少により、教師が孤立化する
- 多忙さを背景とした慣例化による取り組みのマンネリ化

高校間連携で学校力を高める

現状の課題解決

- 学校を超えた交流で、生徒・教師が刺激し合い、切磋琢磨できる
  - 情報交換会を行うことで、他校の教師からも指導方法を学び、情報を得られる
  - 自校だけでなく他校のベテランからも学べ、若手教師の指導力向上につながる
- など

未来に向けて

- 「共助共生時代」に必要とされるリーダーを、様々な学校と連携しながら育てられる
  - 教師自身が多様な意見に触れて教育力を高めることで、新しい価値観を創造できる生徒を育てることが出来る
- など

「事例」を通して考える

# 2 高校間連携の成功に必要な要件とは？

高校間連携に対する代表的な不安や疑問

進路目標や授業進度が異なる学校同士が連携してもかみ合わないのでは？

連携の在り方を他校との関係の中で考えた実践例

福井県・嶺南地域の高校間連携

各学校が自校の強みを生かし、「学校の違い」を活力源とする連携を目指す

[P.10]

本音での話し合いにならず、自校の課題解決にはつながらないのでは？

連携の成果を自校の中で生かした実践例

広島県トップリーダーハイスクール支援事業

自校の課題意識を明確化し、他校から得た情報やノウハウを精選し、自校に還元する

[P.13]

※学校力とは、経営力、SI、指導力、学力、安全・危機管理と定義した（2006年4月～9月号参照）

高校間連携の可能性

# 「自立型連携」で学校力を底上げし、地方から日本を活性化する

広島県立安古市高校教頭 **小路口真理美** / 鹿児島県立川内高校教頭 **藤崎恭一**

学校の小規模化や、教師の年齢構成のゆがみが顕在化する中、各県での高校間の連携を中心となって進めてきた管理職の二人の先生に、学校力を高める手段の一つである高校間連携の可能性について話を聞いた。

● 広島県 鹿児島県の高校間連携  
各県で動き出した  
公立高校の連携

**小路口** 広島県では2000年度より、「高等学校学力向上対策事業」を行っています。現在の主な内容は、生徒の合同合宿や県内外の大学・企業訪問、更に教師の教科指導力向上を目的とした指導教諭（\*）の授業聴講などです。毎年、県教委が県内の高校から「トップリーダーハイスクール」「チャレンジハイスクール」「ステップアップハイスクール」をそれぞれ指定し、高校間で連

携を図りながら進められます。私が勤務する安古市高校は事業がスタートして以来、「トップリーダーハイスクール」5校のうちの1校に指定されています（図2）。

**藤崎** 鹿児島では07年度に県内の進路指導主任会に参加した教師の中から有志が集まり、「鹿児島県進路指導ステップアップ研究会」（以下、「鹿進研」）を設立しました。以来、県の進路指導力を高めるために自主的に活動を続けています。普通科を中心とした全ての高校が連携して毎年、総会を兼ねた進路指導主任研修会、中堅・若手教師を対象とした

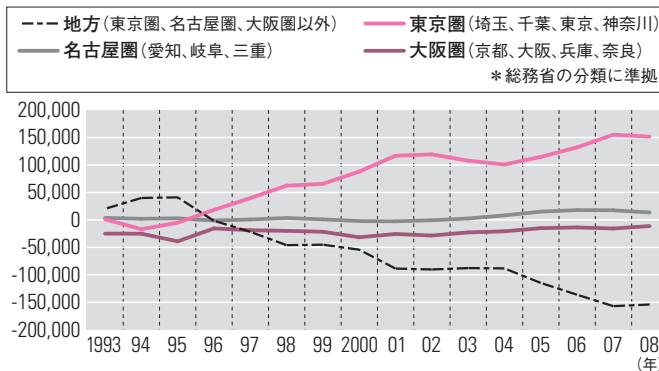


広島県立安古市高校教頭 **小路口真理美** Syoiguchi Marimi

教職歴30年。同校に赴任して2年目。担当教科は国語。広島県立呉三津田高校勤務時に、広島県エキスパート教員に選出。「総合的な学習の時間」La Goya Senzua a Mitura（三津田ヶ丘の悦ばしき知）の創設に尽力した。

キャリアアップセミナー、そして難関大を志望する生徒を集めた学習セミナー（合同学習会）を行っています

図1 三大都市圏と地方の人口増減（単位：人）



出典 / 総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告 第2表 転入超過数の推移」を基に編集部で作成

\* 教壇に立つと共に、教諭などに対して教育指導の改善及び充実のために必要な指導・助言を行う

図2 広島県・鹿児島県の高校間連携

**広島県 トップリーダーハイスクール支援事業 概要**

◎指定校  
休まつた  
 呉三津田高校 尾道北高校 福山誠之館高校 府中高校 安古市高校

◎主な事業内容

①合同学習合宿  
**内容** 難関大を志望する2年生を対象に、国立江田島青少年交流の家にて3泊4日の合宿を実施。指導教諭による難関大志望者向け授業、難関国立大に進学した先輩の進路講演会などを行う。

②大学・企業訪問  
**内容** 8月に1年次の希望者を対象に、東京方面の大学の研究室、最先端研究所などを3泊4日の日程で訪問。更に12月には県内の大学・企業を訪問。

③教科指導力養成事業

---

**鹿児島県 鹿児島県進路指導ステップアップ研究会 概要**

◎参加校  
 鹿児島県内の普通科高校を中心とした全ての高校（11年度）

◎主な事業内容

①進路指導主任研修会  
**内容** 進路指導主任を対象とした情報交換、講演など。年2回実施。

②キャリアアップセミナー  
**内容** 中堅・若手教師を対象とした進路指導に関するスキルアップ研修。進路指導ストーリーや年間指導計画の作成演習、外部講師による講演、情報交換など。年2回実施。

③生徒学習セミナー（郷中ゼミ）  
**内容** 難関大を志望する2年生（冬休みに1日）、3年生（夏休みに2日）を対象に行う特別講義。夏休みのセミナーには、県内全域から100人～300人の生徒が参加（人数は年度により異なる）。

す。（図2）。  
 発足の背景には、県全体の進路実績が低迷する中で、東京大・京都大などの難関大合格のための指導ノウハウが失われてしまうのではないかと、という現場の危機感がありました。校内LANなどの導入で、業務の回転が速くなった反面、教師間の会話や先輩教師が後輩を指導する機会が少なくなる傾向にあります。30代の

若手教師が多く、学校の中心となるベテラン層が少ない本県が教育力を高められるかどうかの瀬戸際だという思いがありました。  
**小路口** 広島でも公立高校が生徒の進路をどう実現していくのかが、課題となっています。県が主導する事業ではありませんが、現場の教師も公立高校の生徒の学力向上には、一丸となって取り組まなければ解決は困

難だと考えるようになりました。「広島で学んで良かったと思える日本の教育界の創造」を目標として連携を進めています。

●高校間連携のメリットと課題  
**刺激を受ける生徒と教師  
 各校の自立は不可欠**

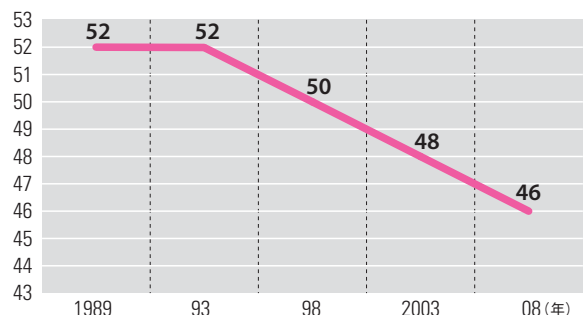
**藤崎** 近年、地方から大都市圏への人口移動が見られます（図1）。それに加え、全体的に一校当たりの教員数の減少など学校の小規模化が進んでいます（図3）。しかし、生徒の成長にとって多様な人々との出会



**鹿児島県立川内高校教頭  
 藤崎恭一 Fujisaki Koichi**  
 教職歴28年。同校に赴任して3年目。担当教科は数学。鹿児島県立甲南高校では、進路指導主任として「K-1プロジェクト」（総合的な学習の時間の設立、進路学習の推進などを通して、進路実績の向上に努める）

いは不可欠です。その点から高校間連携は有効な手段の一つではないかと思えます。実際、合同学習合宿で他校の生徒たちが頑張る様子を目にし、自分ももっと頑張ろうと、より高い志望を掲げる生徒も出てきました。また、それ以上に大きなメリットは、教師への影響だと私は思います。実際に他校の教師の指導を見たり、他校の生徒を教えたりすることで刺激を受け、授業改善の工夫を始めるきっかけにもなっています。

図3 公立高校1校当たりの本務教員数推移（単位：人）



出典 / 文部科学省「学校基本調査」(公立高校の本務教員数と公立高校数から算出し編集部で作成)  
 ※小数点第1位を四捨五入して表示した

**小路口** 確かに、学習合宿や大学・

企業訪問で他の高校の生徒に出会ったことで、化学反応が起きたように急激に成長する生徒はいますね。生徒がギアチェンジしようとしているタイミングでこうした連携の機会を設ければ、生徒を後押しすることになるでしょう。教師が他校から刺激を受け、「生徒にとって良い授業・良い指導とは何か」を話し合い、考える機会は、管理職などが意図的につくり、提供することが必要な時代になってきていると思います。

**藤崎** また、同じ学校に勤務する者同士だと意外と遠慮もあり話しくい場合もありますが、学校が違うとストレートに話が出来て、お互いに参考になることもあるでしょう。特に、志の高い、若い教師を精神的に支えていくには、校内だけでなく、校外のネットワークも大切です。将来、学校や県でリーダーとなる人た

ちが、学校の枠を超えて気軽に情報交換できるような人間関係の土台をつくるのが出来ればと願っています。鹿進研では、「話を聞きたい、資料を見せて欲しいといった申し出しは、お互い出来るだけ受けるようにしましょう」と呼び掛けています。ノウハウを共有するだけではなく、志を同じくし、研鑽を積めるような連携を目指したいですね。

**小路口** 高校間で連携をする上では他校から学ぶだけではなく、「自校が他校に示せるものもある」という、対等な関係が望ましいでしょう。そういう意味では、広島の特ップリーダーハイスクール5校も、それぞれ学校の強みを生かして、学び合うような関係になってきていると感じています。

**藤崎** 全県レベルで広く集まって学ぶ一方で、身近な課題に関しては同じような環境の高校同士が連携する

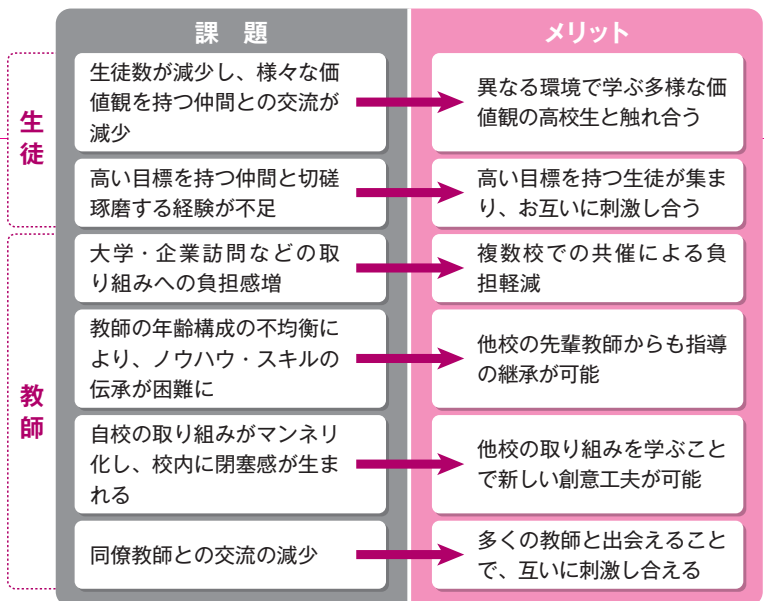
スタイルも有効な手段かと思えます。課題に対するアプローチの違いが、まさに各学校の良さとなっていくかと思えます。

**小路口** トップリーダーハイスクール5校も、県で指定されている事業だけでなく、各校の特徴を生かした緩やかな連携を模索し始めています。例えば昨年度から、指定5校と、スーパーサイエンスハイスクール指定の広島

国<sup>こく</sup>泰<sup>たい</sup>寺<sup>じ</sup>高校と併設型中高一貫教育校の広島高校の2校の管理職が集まり、各校の指導の在り方について共有し合うようになりました。更に本校では、課題となっていた進路検討会議の運営方法や使用する資料について、トップリーダーハイスクールに指定されている他校を訪ね、学びました。

**藤崎** 他校の取り組みをやみくもに

図4 高校現場の課題と高校間連携のメリット



## 多様性を認め合う次代の

## 新しいリーダーを育てたい

小路口先生

まねるのではなく、まず自校の取り組みのどこに課題や改善の余地があるのかを考える、自己評価が重要だと思います。「何のために連携するのか」を明確にしていくことで、連携がより実のあるものとなっていきます。

**小路口** 連携事業の最終的な目的は県全体の教育力を高めることです。が、学校の自立と自律は連携におい

ても不可欠です。しかし、それは過去の成功モデルに追随するのではなく、自校の在り方を考える中で築きたいものです。改善に当たってはP D C Aサイクルに連携事業を組み込むなどして、成果につなげたいと考えています。(P.13記事参照)。

#### ● 高校間連携の展望

### 次代を生き抜く力を 学校を超えて養っていく

**藤崎** 当然のことながら、学校や地域によって高校間連携にかける思いには違いがあります。しかし少子化の中で生徒に多様な出会いや、学習・進路への動機付けの機会を与えるためには、公立高校間の連携によるネットワーク形成が必要となつていると考えています。特に、近い将来公立中高一貫校が躍進し、地域に大きなインパクトを与えることが予想されます。そのような状況下で郡部の公立高校が存在感を発揮するためには、同じような環境の高校と連携を進め、対策を講じるのも一つの方法です。

**小路口** 新学習指導要領に提起された「学び直し」を契機として、公立高校も各高校同士だけではなく地元中学校とも連携し、「6年間かけて一緒に子どもたちを育てていく」はどうしたらいいか」を話し合うことが欠かせません。高校は今以上に自校の魅力を高め、中学生にとって学習のモチベーションを向上させる存在になつていかなければならないでしょう。

**藤崎** 昨今の世界情勢を見れば、これからの高校生には新しい価値観を創造する力が必要であり、多くの生徒が通う公立高校には大きな期待が寄せられています。そのためには、我々教師も他校との交流を深めて、多様な意見に触れながら、教育力を高める必要性を感じます。

**小路口** 新しい価値観といえば、自校では「他の人のために何が出来るか」という視点で進路を語る生徒が増えたように思います。東日本大震災が生徒の意識に少なからず影響しているのかもしれない。多様性を認め合いながら生きる「共助共生時

## 地方公立高校が力を高めて 日本全体を底上げしたい

藤崎先生

代」のリーダーをどのように育てるか、それはいろいろな学校の生徒、教師と一緒に活動する中で答えが分かってくる間いだと思います。

**藤崎** 生徒は思わぬきっかけで興味の幅を広げるものです。高校には、いろいろなコンクールやイベントのポスターが送られてきますが、中には自校の生徒はほとんど参加しないようなものもあります。しかし、本校では「たとえコンテストに参加しなくても、自分が知らない世界で一生懸命活動する高校生がいることを知ることに価値がある」という校長の考えから、そうしたポスターでも出来るだけ掲示するようにしています。さまざまなアプローチで、生徒の心を刺激し続けるには大切なことではないかと思えます。

**小路口** 高校間連携と聞くと、「自

校のノウハウが流出してしまうのではないか」という不安を抱くかもしれません。しかし、他者に問うことをしなければ、いつしか独善に陥ってしまうものです。ですから、高校間連携は、むしろ他者から評価を受けるチャンスだと捉えてほしいと思います。また、これまでの連携事業を振り返ることによって、教師・生徒双方が確実に成長できると確信しています。

**藤崎** 日本の高校生の多くは、地方公立高校で学び、育ちます。だからこそ、地方公立高校の衰退は、将来、日本全体の衰退にもつながるのではないかと懸念しています。これに歯止めをかけるには、生徒も教師も学校の枠を超えて語り合い、自校の力を高め合っていくことが求められていると思います。

## 事例 ①

### 時間と共に 進化する連携

#### ●連携の発端

#### 地理的に隔絶された高校が 危機感を共有

「嶺南」と呼ばれる福井県・若狭湾沿岸地域では、十数年前から普通科を設置する高校5校が、生徒の学力と教師の指導力の向上を目指し、多様な連携事業を展開している。

発足当初は、進路指導に関する有志の自主研修会が中心であった。日々の学習指導や推薦入試対策など、その年の幹事校がテーマを設定し、情報交換が行われていた。この

#### 福井県・嶺南地域の高校間連携

## 各校が

## 自校の強みを生かして 連携事業全体に貢献

福井県の嶺南地域では、「地域の子どもを地域で育てる」ために5校で連携事業を行っている。自校の強みを生かしながら他校と共に高まることを目指す連携の形成過程を取り上げる。

頃から取り組みに参加している若狭高校の中村秀明先生は「連携は、他地域から地理的に隔絶された嶺南地域内での、教師の交流を目的にスタートした」と振り返る。

「当時は、近隣の高校同士でも情報交換する機会はあまりなく、お互いがどんな指導をしているのかを知ることがありませんでした。また、校内で目の前の生徒の力を伸ばし切れていないという思いは、多くの教師が持っていたと思います。地域の子どもたちを地域でしっかりと育てるためにも、高校が連携して嶺南地

域全体の教育力を高める必要があるという声が上がってきました」

研修会の成果は、徐々に目に見える形で表れた。

「当時の嶺南地域の高校は、福井市内の高校に比べると大学入試に関する情報が集まりにくいいため、生徒や保護者、そして教師も大学進学に対する意識が希薄で、国公立大への合格実績も伸び悩んでいました。しかし研修会で、他校の教師から情報や経験談を聞き、自分になかった視点や指導ノウハウに触れたことで、『もつと出来るはずだ』という気持ち

#### 福井県立若狭東高校

◎1920(大正9)年に遠敷郡立遠敷農林学校として開校。「進取・敬愛・誠実」を校訓に、豊かな人間性を涵養する教育を目指す。大学などへの進学率は4割、6割は地元企業を中心に就職する。近隣の学校と比較して、卒業生の地元就職数が多いのが特徴。

設立 1920(大正9)年

形態 全日制／普通科／産業技術科／生活科学科／電子機械科／電気科／共学

生徒数(1学年) 約190人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、都留文科大、福井県立大に3人が合格。私立大は、早稲田大、愛知学院大、金沢工業大、大阪学院大、大阪産業大、関西大、摂南大などに延べ29人が合格

住所 〒917-0293 福井県小浜市金屋 48-2

電話 0770-56-0400

Web Site <http://www.wakasahigashi-h.ed.jp/>

#### 福井県立若狭高校

◎1897(明治30)年、小浜尋常中学校として開校。「異質のものに対する理解と寛容」を教育理念に、独自の教育を展開し、リーダーとして地域や社会に貢献できる生徒の育成をめざす。生徒の90%が進学する。2011年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定。

設立 1897(明治30)年

形態 全日制・定時制／普通科／理数科／商業科／情報処理科／共学

生徒数(1学年) 約300人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大、京都大、名古屋大、金沢大、福井大、滋賀大などに118人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、関西大、近畿大、立命館大、龍谷大などに延べ337人が合格。

住所 〒917-8507 福井県小浜市千種 1-6-13

電話 0770-52-0007

Web Site <http://www.wakasa-h.ed.jp/>

ちが個々の教師に芽生えました。連携の中で得た情報も活用しながらそれぞれの高校で進路指導などを改善していったところ、各校で合格者数が増えつつあります」（中村先生）

以来、連携事業は予備校講師を招いた難関大入試への対策講座、更にセンター試験対策講座と生徒対象の取り組みも立ち上げながら拡充された。だが、そうした内容に物足りなさを感じる教師もいた。2006年度から若狭東高校に勤務する中森一郎先生もその一人だった。

「私が異動した年に、若狭東高校は連携事業の幹事校になりました。生徒の半数以上が就職する本校が、



福井県立若狭東高校  
**中森 一郎** Nakamori Ichiro  
教職歴26年。同校赴任歴6年目。進学指導室長。国語科。



福井県立若狭高校  
**中村 秀明** Nakamura Hideaki  
教職歴25年。同校赴任歴4年目。進路指導部長。数学科。

国公立大志望者が多い高校と連携する意義は何だろうかと考えました」  
確かに、同校にもセンター試験対策講座などに参加する生徒は、少数ながらもいる。参加した者は、同じ地域に住む他校の生徒が高い目標を掲げて学習に打ち込む様子を目にし、全国規模の大学入試の厳しさに気が付き、刺激を受けてくるという。

「しかし、大学進学を目指すような生徒だけでなく、本校の多くの生徒のように卒業後、就職して嶺南地域で生活を続けていく子どもたちの基礎学力を高め、進路意識を刺激する連携も行わなければ、地域の教育力の底上げにはつながらないのではないかと考えたのです。また、進学校のノウハウを取り入れるだけでなく、本校独自の強みを生かしながら連携事業全体に貢献したいという思いもありました」（中森先生）  
そこで、それまでの上位層の生徒をターゲットにした取り組みに加え、地域の中下位層にスポットを当てようという連携も行われるようになっていった。

●連携の深化  
自校の強みを生かした地域貢献を模索する

嶺南5校の連携に大きな変化があったのは3年前だ。連携事業の一つに、福井県で一斉に行われる小論文講座が組み込まれていた。もともとは県の学力向上事業の一環として行われていたもので、講師への謝礼や教材費は県が負担していた。ところが09年度からは県の予算も縮小され、地域ごとの開催となった。これまで通りの開催が難しくなっ

まったことで、若狭東高校が中心となって、小論文講座の立て直しを図っていくことになった。

「従来は、一人の講師が生徒全員に対して学部系統ごとの出題傾向などを説明する形態でした。しかし、学校や生徒の状況を踏まえていない一般論を聞く場となっていたので、もつと生徒一人ひとりが満足する方法があるのではないかと思っていました。日ごろから生徒と担任の交換ノートや週末課題を通して学校全体で『書かせる指導』に取り組んでいた本校なら、何か貢献が出来るので

嶺南地域の高校間連携

□概要

当初、有志の教師の自発的な集まりからスタートした嶺南地域の高校間連携だが、現在は福井県の「高校生『総合的な学力』向上推進支援事業」の一環として、県のサポートを受けるまでに発展した。だが、運営主体はあくまで嶺南地域の教師であり、その時々々の生徒の実態を捉えながら、取り組みの内容は毎年見直されている。例えば、昨年まで行われていた「センター試験対策講座」は各校単体でも対応できる内容であると判断し、今年度からは内容が刷新されている。

□連携校

私立・敦賀気比高校 敦賀高校 美方高校 若狭高校 若狭東高校

□取り組み例（抜粋）

- ①小論文対策講座  
小論文の基礎基本を講義とグループワークを通して学ぶ。8月に実施。
- ②センター試験対策講座  
国数英の3教科について苦手科目克服を主眼に、2泊3日の学習合宿を行う。8月に実施。
- ③難関大個別学力試験対策講座  
外部講師による英語、数学（文理別）、現代文の講義を聴く。7月に実施。
- ④難関大個別学力試験指導法講座  
外部講師を招いて、英語、数学（理系）、現代文の指導法を教師が学ぶ。10月に実施。

はないかと考えたのです。そこで本校の教師が講師を務め、新たな小論文講座を行うことにしたのです」(中森先生)

09年8月の小論文講座に向けて、若狭東高校は5月には教師12人の指導チームを発足。人文・教育、医療・保健など5分野を1〜3人の教師が担当し、教材研究を開始した。

自校の生徒だけでなく、地域の進学校の生徒を指導することになり、若狭東高校の指導チームは、何度も自主教材を修正し、模擬授業を行い、入念に準備をした。

「一般的にほとんどの教師は、小論文指導を専門的に学んできたわけではありません。ノウハウの共有を積み重ねて、指導力を高めています。講座の準備や実際に他校の生徒を教える経験を通して体系立てて小論文の指導力を向上できるのでないかと期待しました」(中森先生)

若狭東高校で開催した新しい小論文講座には、若狭東高校を含めて4校から、計157人の生徒が参加した。60分間で小論文を書き、90分間の講義を聴いた上で、60分間でリライトを行って、それを生徒が相互評

価するという流れだ。

新しい小論文講座は生徒、教師双方に大きなインパクトを与えた。若狭東高校の生徒は日々の取り組みが結実し、進学校の生徒と同等以上の文章を書けたことに自信を深めた。一方、進学校の生徒は考える力、文章を書く力を持つ他校の生徒の存在に驚き、小論文への興味を深めた。

「メリットは本校の教師にもありました。他校の生徒に対して授業をするという緊張感が良い刺激となり、他校との連携の取り組みを通して私たち自身の指導スキルも高まったと思います」(中森先生)

新しい小論文講座を見学した中村先生は、5分野全ての講座が同じ流れで進行している様子を見て「若狭東高校内できつと入念に準備をしたのだろう」と感動したという。

「初年度の本校からの参加者は推薦入試志望者が中心でした。しかし、講座を体験した生徒から評判を聞き、翌年は一般入試を目指す生徒も多く受講するようになりました。他校の生徒と小論文のテーマについて議論を深める経験が、思考力や表現力を鍛える上で役に立つと分かっ

たのでしよう」(中村先生)

### ●連携のこれから 緊密な連携を結び 地域の教育力を高める

若狭東高校が「自校の強みを生かした地域貢献」を追求したことが、連携事業の中で小論文講座の発展につながった。中森先生の「一般入試対策を本校が主催してもあまり意味がない。責任を持って出来ることは、当時は小論文しかなかった」という言葉はその裏付けともいえる。

更なる進化を遂げるべく、小論文講座は今年度から若狭高校と若狭東高校の教師がペアを組んで進めるように改められた。各校の教師の指導力を向上させて地域の教育力を高めたいとの考えだ。

「小論文講座での学びはあくまできっかけです。日々の指導があつてこそ、連携事業の講座が生きてきます。だから、複数の高校の教師が講師を務め、ノウハウを各校に持ち帰り、地域全体で教師のスキルアップを図りたいと考えました。生徒が相互評価をするなどのグループワークに取り組む意義などを他校の先生に

知ってもらいたいという気持ちもありました」(中森先生)

高校間連携での小論文講座は、各校の小論文指導において一里塚として機能しているという。

「小論文講座の事前、事後指導を検討し、体系的になるように自校の小論文指導を再構築しています。今後は、更に多くの教師に講座を体験してもらい、『他校の取り組みから多くを学べる』ことを実感してほしいと考えています」(中村先生)

十数年続けてきた連携の最大の成果として、中村先生も中森先生も「校内外で教師の意思疎通がスムーズになったこと」を挙げる。

「3年間で卒業する生徒とは異なり、教師はもう少し長い期間地域に残ります。連携を一層強め指導力を高めねば、地域が発展しないと、今では多くの教師が自覚しつつあると思います」(中森先生)

「そうした自覚が全教師共通のものとなれば、どの高校に進んだ生徒であっても、地域が責任を持って伸ばすことが出来る。これは理想ではなく、十分に実現可能なことだと私は思っています」(中村先生)

## 事例 ②

他校のノウハウを  
自校に生かす連携

### 広島県トップリーダーハイスクール支援事業

# 高校間で切磋琢磨し 連携で学んだ指導を 自校の力とする

広島県の「トップリーダーハイスクール支援事業」(P.7図2)では、5校の進学校が連携し、事業を行っている。広島県立安古市高校に、合同学習合宿と県外大学・企業訪問の様子と、連携の自校への還元方法について聞いた。

## 他校と合同の学習合宿を自校の指導に生かす

生徒は良きライバルを得て  
教師は指導改善の  
ヒントを学ぶ

2011年度8月、広島県「トップリーダーハイスクール支援事業」の合同学習合宿が、国立江田島青少年交流の家で3泊4日の日程で実施された。難関大を志望する2年生が

対象で、各校20人を上限に募集。安古市高校からは15人が参加した。国語・数学・英語の3教科で県に指定された指導教諭による授業、「無言学習」と呼ばれている自学自習、更に難関大に進学した卒業生の講演が行われる。運営業務は呉三津田高校と安古市高校が隔年で担当しており、今年度は安古市高校の当番で

あった。取りまとめ役を務めた2学年主任の金本仁志先生は、「各校とも参加した生徒の満足度は高く、学習の動機付けとして効果的に機能している」と取り組みを評価する。

「難関大を目指す県内の生徒が120人以上集まり、指導教諭のハイレベルな授業を受けるのですから、とても刺激になっているようです。同じ広島県立高校出身の先輩の話聞き、自分も頑張れば難関大に行けるのではないかと、志望を高め

て合宿を終えています」(金本先生)

合宿では、異なる学校の生徒で班を形成し、同じ部屋で生活する。最初は部屋割りを見て「他校の生徒とうまくやっていけるだろうか？」と不安な表情を見せるが、いざ合宿が始まれば皆すぐに打ち解け、4日間の合宿を励まし合って乗り切っている。合宿終了後も連絡を取り合い、学習の進捗状況を報告し合っている生徒もいるという。

また、合宿は、教師にとっても学

特集 高校間連携で「学校力」を高める

SPECIAL ISSUE

PROFILE

#### 広島県立安古市高校

◎1975(昭和50)年開校。「**仰高**(心豊かな人生の創造を目指し高遠の理想を仰ぐ)」を校訓として、向上心と理想を持って研鑽を続ける人材の育成に取り組む。2009年度から県の「トップリーダーハイスクール」に指定され、学力向上の取り組みを更に充実させている。

設立 1975(昭和50)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数(1学年) 約320人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、名古屋大、大阪大、神戸大、広島大、九州大などに184人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ581人が合格。

住所 〒731-0152 広島県広島市安佐南区毘沙門台3-3-1

電話 082-879-4511

Web Site <http://www.yasufuruichi-h Hiroshima-c.ed.jp/>

びの場だという。指導教諭の授業から学んだり、教師同士の会話の中からヒントを得たりするのはもちろんだが、「難関大を目指す他校の生徒に接し、その様子を知ることが有益だ」と金本先生は説明する。

「生徒を見てみると、しっかりあ  
いさつが出来る高校、休憩時間から  
上手に授業に切り替えられる高校な  
ど学校ごとに特徴があります。他校  
の生徒と比較しながら、自校の生徒  
はどう成長しているのかを確かめ、  
これから必要な指導は何かを考える  
機会になっています」(金本先生)

更に、合宿中に生徒が挑戦した問  
題の解答を分析することで、各校が  
どんなところに重きを置いて指導し  
ているのかも見てくるといふ。当然、  
それは自校に戻ってからの指導の改



広島県立安古市高校  
河野幸夫 Kohno Yuki  
教師歴23年。同校赴任歴6年目。1  
学年主任。地歴科。



広島県立安古市高校  
金本仁志 Kanemoto Hiroshi  
教師歴27年。同校赴任歴7年目。2  
学年主任。数学科。

善のヒントとなる。

### 合同学習合宿を踏まえて 自校の取り組みを改善する

安古市高校が特に留意しているこ  
とは、合同学習合宿の成果を参加生  
徒だけにとどめず、学校全体に還元  
することだ。合宿の様子などを、生  
徒全員に学年通信で報告するだけ  
なく、既存の取り組みの改善にも役  
立てている。

「夏期ロングラン学習(\*)、春季  
学習合宿では、合同学習合宿に参加  
した生徒の感想を参考に、自学と講  
義を選択して学べる時間を設けてみ

## 他校と合同の大学・企業訪問を自校の指導に生かす

### 憧れの世界を 他校の生徒と歩く

県外大学・企業訪問は1年生を対  
象に8月に行われる。参加生徒数は  
各校4〜10人程度。事前学習を経て、  
東京大訪問、東京大生との座談会、  
そして企業や研究所の見学などを3  
泊4日の行程でこなしていく。

ました。また、本校は部活動が盛ん  
なので、練習のため合同学習合宿だ  
けでなく、本校の学習合宿にも参加  
できない生徒がいます。そこで、あ  
る部では、顧問の発案で練習後、教  
室を確保して自学自習の時間をつく  
りました。これは顧問が合同学習合  
宿に参加した生徒から、「何時間も  
集中して皆で勉強する効果」を聞いた  
からです」(金本先生)

生徒、教師共に大きな刺激を受け  
る合同学習合宿だからこそ、そこで  
の学び、気付きを一過性のもものに終  
わらせず自校の取り組みに取り入れ  
ようという意志が同校にはある。

今年度、引率を務めた1学年主任  
の河野幸夫先生は「これだけ内容の  
濃い研修を、本校1校だけで実現す  
るのは困難」と、県教委主導のメリッ  
トを率直に評価する。

「憧れ以上の存在である東京大の  
キャンパスを実際に歩き、大学生に  
高校時代の過ごし方などを聞くこと  
で、『努力次第で自分も行けるかも

しれない』と生徒は思うようです。  
また、日本を代表するような企業を  
訪ね、最先端の研究などを前にした  
ときは、本当に食い入るような表情  
で見えています。そして、何より他校  
の生徒と共に過ごし、宿舎で一緒に  
学習に取り組む中で、『自分ももつ  
と頑張らなければいけない』と決意  
を新たにしています」(河野先生)

3泊4日の体験は、生徒の進路意  
識を大いに刺激する。だからこそ、  
参加者募集の段階では、学力は高い  
が志望がまだ明確でない生徒、学力  
的な伸びしろが大きい生徒に教師は  
意識的に声を掛ける。また、他の生  
徒への波及効果も狙い、参加した生  
徒に訪問の成果を冊子にまとめさ  
せ、学年集会などの場で報告させて  
いるという。

### 自校の課題を語り合い 信頼関係を築く

合宿を引率する教師は各校一人。  
人数は少ないが、それでも情報交換  
の場として確実に機能している。  
「大学訪問や企業訪問など、それ  
ぞれの高校でどんな進路指導の取り  
組みが行われているか、いろいろ情

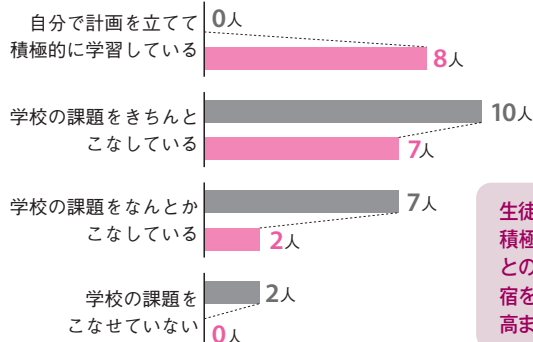
\*夏期ロングラン学習では合同学習合宿に準じたプログラムを実施するが、学校の施設を利用し、宿泊はしない

報交換が出来ました。また、他校の教師との間に信頼関係が出来てくると、日々の生徒への声掛けなど、かなり具体的な話も出来るようになりました。実感したのは、教えてもらうばかりではなく、こちらの実情を隠さずに話すことが大切だということとです。それが出来てこそ、本当に知りたいことが話し合えるのだと分

かりました」(河野先生)  
持ち帰った情報は、学年会や教代会などを通して、校内で共有するようになり心掛けたという。「そういう指導をしているのだから、A校は実績を上げていくのだろう」といった先輩教師の分析を聞くことで、更に自身身の学びになった、と河野先生は振り返る。

## トップリーダーハイスクール支援事業の効果と、自校の指導への還元

### ① 合同学習合宿に参加した生徒の学習意欲の変化

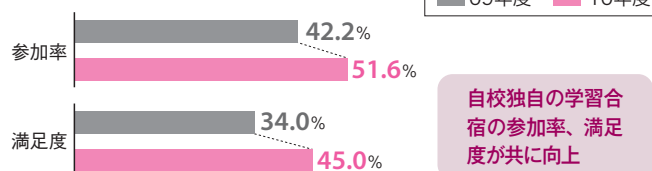


生徒の学習への積極性は、他校との合同学習合宿をきっかけに高まった

上記の成果を踏まえて、同校では2010年度から自校単独の夏期ロングラン学習において、「部活動で全ての行程に参加できない生徒の部分参加」も認めた。

その結果…

### ② 夏期ロングラン学習での生徒の参加率と評価



自校独自の学習合宿の参加率、満足度が共に向上

\*「満足」「おおむね満足」「やや不満」「不満」の4段階のうち、「満足」と回答した割合

\*2010年度安古市高校の調査から抜粋

## 高校間連携を自校の改革につなげる

### 学び合い、競い合いながら お互いの存在感を高めたい

金本先生も河野先生も「他校からいろいろな話を聞いて学ぶことも大切だが、それをいかに自校に取り込んでいくかがより重要」と口をそろえる。

「県外大学・企業訪問や合同学習合宿での情報交換からさまざまなヒントを得て、既存の取り組みの見直しに発展することもありました。例えば、本校は近年、進路検討会議の運営方法や資料の様式を大きく変えました。これは他校との情報交換をきっかけに後日更に学校訪問などを行って、そこで学んだことを本校用にアレンジし直した結果です。『他校から学び、本校に合った形で取り入れよう』という姿勢は、トップリーダーハイスクールの取り組みに参加していることで強くなったと感じます」(河野先生)

これまでも他校の教師との情報交換はあったが、各教師の個人的なつながりを基盤にしたものであった。それが県で連携の場を設けたことで、組織的に学校単位で交流がしやすくなったと金本先生は語る。

「本校はトップリーダーハイスクール5校の中でも学校の歴史が浅く、チャレンジを続けなければいけない立場です。また、トップリーダーハイスクールに選ばれ続けることが学校のアイデンティティーの一つにもなっています。伸びしろが大きい生徒たちを育てるために、他校から学べることはどんどん学ぼうという思いです。しかし、安易に他校のまねをするということではもちろんありません。本校の取り組みにも、誇れるものはたくさんあります。連携を通して、競うべきところは競い合いながら、公立高校としてのそれぞれの存在感を高めていきたいと思えます」(金本先生)



石川県立  
小松高校

進路指導体制の組織化

# 組織力を生かした「小松メソッド」で生徒の力を伸ばす

◎創立以来の校是は「自主自律」「文武両道」。2003（平成15）年度から石川県「いしかわスーパーハイスクール」、06（平成18）年度から文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。校舎は三代目加賀藩主前田利常の隠居城小松城址内にある。

設立	1899(明治32)年
形態	全日制／普通科・理数科／共学
生徒数	1学年320人
11(平成23)年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、金沢大、東京大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに250人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、立教大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ402人が合格。
住所	〒923-8646 石川県小松市丸内町二ノ丸15
電話	0761-22-3250
Web Site	<a href="http://www.ishikawa-c.ed.jp/~komafh/">http://www.ishikawa-c.ed.jp/~komafh/</a>

変革のステップ

背景

◎組織的・戦略的な進路指導体制が整っておらず、難関大受験者も少なく、進路実績は横ばい

STEP 1

実践

◎「学習の記録」で生徒の学習状況を把握し、学年集会の充実で学校の一体感を醸成するなどの「小松メソッド」を確立

STEP 2

成果

◎生徒の学校への信頼感が向上。改革初年度の卒業生の国公立大現役合格者数は200人を突破。今年度は277人と過去最多

STEP 3

「待ち」の姿勢が目立つ生徒  
自主自律を柱とした指導を見直し

石川県立小松高校が学校改革に本格的に取り組み始めたのは、2003（平成15）年のことだ。以降、新たな取り組みを導入しながら、成果の見られたものを継承する形を繰り返して、独自の指導体系「小松メソッド」をつくり上げてきた。改革の背景には、組織的・戦略的な指導体制が確立されておらず、教師によって指導にばらつきがあるという課題意識があった。進路指導課主事の紺矢亮一先生は次のように話す。

「本校は以前から地域の拠点校として、成績上位層の生徒が多数入学していましたが、難関大を志望する生徒はさほど多くなく、改革前の数年間は進学実績が横ばいでした。校訓である『自主自律』の精神に基づき、生徒の志望を尊重する指導をしてきましたが、全校体制で組織的に指導を行えば、もっと生徒の力を伸ばせるのではないかという思いがありました」

生徒の気質の変化も、学校改革に着手した大きな理由だ。10年ほど前から、学習に対して「待ち」の姿勢の生徒が目立ち始め、自主性に任せる指導だけでは対応が難しくなっていた。例えば、難関大を志望する生徒を集めて問題集を紹介すると、以前は自分で購入していたが、その頃からは、教師が用意するのを待つようにな

り、ほとんどの生徒は自ら動かなくなつた。そのような受け身の姿勢は、成績にかかわらず多くの生徒に見られたという。

こうした課題意識のあつた03（平成15）年に、同校は県の「いしかわスーパーハイスクール」に指定された。校内に改革の機運が高まり、当時の校長が自ら全教師の授業を見学するなどして授業改善に乗り出した。続いて、教師の組織的な体制による学力向上策や、生徒がチームとして受験に臨める集団づくりなどの取り組みを充実させ、「小松メソッド」の七つ道具（\*）



石川県立小松高校  
**紺矢亮一** Konya Ryoichi  
教職歴27年。同校に赴任して14年目。進路指導課主事。「全ては1時間のために、全ては生徒たちのために」



石川県立小松高校  
**田中真治** Tanaka Shinji  
教職歴27年。同校に赴任して4年目。1学年主任。「大吉を引くコツは、大吉が出るまで引くこと」



石川県立小松高校  
**土山樹一郎** Tsuchiyama Kitchiro  
教職歴26年。同校に赴任して4年目。3学年副主任。「攻めの進路指導と刺激のある教育を提供する」



石川県立小松高校  
**兼近理子** Kanachika Noriko  
教職歴14年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「変化の積み重ねが結果を生む」

と呼ばれる同校の指導の軸を定めていった。

## 「学習の記録」で 生徒個人と集団を引き上げる

改革に当たり、同校が不可欠と考えたのは、生徒の学習状況の把握だ。そこで、生徒が家庭学習の時間を毎日記録する「学習の記録」を取り入れた。これは、1か月で1枚のシートになつており、教科別の家庭学習時間の推移が一目で分かる。月末に提出させ、「学習の記録」のデータを担任がコンピューターに入力して集計し、学年主任が学年全体の平均学習時間などを算出する。

「集計結果は、個人面談で使うのはもちろん、学年全体の学力の底上げにも活用しています。例えば、平均学習時間が例年より下回つていれば、緊急の学年集会を開いて、生徒に発破をかけます。単に『もっと勉強しなさい』と言うのではなく、過年度のデータを示して、『この時期にはこれくらいの勉強が必要だ』と自校の先輩のデータを基に説明する方が説得力があり、生徒も真剣な表情で耳を傾けます」（紺矢先生）

同様に、個人面談でも先輩の学習時間を示して、「この大学の合格を目指すなら、まだ学習が足りない」などと伝えると、生徒は納得しやすいという。

## 学年集会を充実させ 「チーム」としての一体感を持たせる

生徒にチームとしての意識を高めるために充実させているのは、学年集会だ。学年全体で集まる機会を最低でも2か月に1回は設ける。

「良薬も効果がずっと続くものではありません。学校の方針を常に生徒に行き渡らせるために、少なくとも2か月に1回は学年全体で集まる必要があると感じます」（紺矢先生）

年間行事に組み込んだ全員参加の学年集会以外にも、課題があれば、対象者を絞って昼休みの10分間に集会を開く。10（平成22）年度は「理系ハイトップ集会」「英語苦手者集会」など3年生対象の集会を50回近くも開いた（P.18図）。3学年副主任の土山樹一郎先生はこう話す。

「参加する生徒は一部であっても、その集会で話した内容は学年全体に驚くほど伝わります。学年集会が学年の雰囲気を決める大きな要素になっていると感じます」

2学年担任の兼近理子先生は次のように話

す。「10分でも集会で教師が語り掛けることによって、生徒は今しなければならぬことが何かを実感できるようです。また、数人でも生徒を集めて『集会』の形にすると、生徒個々に伝えるよりも『皆で頑張る』という雰囲気が生まれやすくなります」

\*同校では、学習の記録、週末課題、学年集会、朝自習、添削指導、特別補習、これらの取り組みを支える組織力を七つ道具と位置付ける

図 10 (平成22)年度の3年生の学年集会 (抜粋)

日程	集会名	内容
4月12日	学年集会	決意表明
4月14日	数学トップ集会	東京大、京都大、一橋大、東京工業大の添削の説明
4月15日	英語トップ集会	英文解釈・英作文添削の説明
4月16日	学年集会	1年間の方針・流れを各科目より説明
6月7日	学年集会	高校総体後の補習などの説明
6月10日	文理ハイトップ集会	学習方法について数学科、地歴公民科より説明
6月11日	学年集会	模試分析・8月までの動きを共有
6月15日	理系集会	理科の現状に対して報告
7月13日	英語苦手者(ACE)集会	マークシート試験対策演習の説明
7月16日	進路講演会	夏休み前の天王山集会
9月3日	学年集会	センター試験5か月前集会・進路の手引き解説
9月10日	学年集会	センター試験出願説明
9月14日	理系ハイトップ集会	数学・理科の学習法指導
11月5日	学年集会	出願・受験計画の説明
12月17日	学年集会	進路指導担当者から愛のこもった最後の激励
1月14日	センター激励会	学校長激励(放送)、全校生徒で頑張ろう三唱
1月17日	数学科	スタートダッシュ演習
1月27日	東京大・京都大出願者集会	心構え、激励
2月10日	終業式	学校長・学年主任・進路指導課主事から激励

\*学校資料を基に編集部で作成

学年集会では、情報の伝達にとどまらず、『受験は団体戦』という考えの下、チームで受験に臨むという雰囲気をつくることを心掛ける。

「1年間で学年会全ての教師が話すようにしています。教師によっては自分の高校時代の体験などを話し、温かくユーモアのある学年集会となっています。これは、生徒集団づくりだけでなく、教師と生徒のつながりを深めることにも一役買っています。学年集会を楽しみにしている生徒も多く、教師の話に熱心に耳を傾けてくれています」(土山先生)

学年集会では、叱咤激励したり、受験に向けて頑張る生徒にねぎらいの言葉を掛けたりするなど、時期に応じて内容を練る。例えば、09(平

成21)年度の3年生2学期の集会では、1・2年次の担任で今は他校に異動した教師からの激励のメッセージをビデオで流した。これに感動して勇気付けられた生徒も多かったという。

また、生徒に指導内容を十分に伝えるために、「三度塗りメソッド」を活用する。例えば、数学に課題があった場合、まず学年集会で「これから数か月間とはにかく数学を頑張つてほしい」と伝え、その後、学級でも担任がそれぞれの言葉で同じ内容を伝える。更に、個人面談で、生徒一人ひとりの状況に合わせて数学の対策を進めるように声を掛ける。同じことを3回伝え、全ての生徒に指導を行き届かせるのだ。

「今の生徒は全体に向けて話をするだけで

は、あまり自分のこととは受け止められないようです。個人面談も含めて3回、同じ内容を繰り返せば、個々の生徒に浸透し、生徒同士の話題にも上ようになります。学年集会での発信は、教師の足並みをそろえることにも有効です。数学の教師が英語を頑張るように生徒に伝えるなど、教科間の連携を強めるきっかけにもなっています」(兼近先生)

### 全教師が協力して添削指導を実施 教科指導の向上にもつながる

学力向上対策で力を入れるのは、3年生での添削指導だ。国語、数学、英語は通年、理科はセンター試験後、地歴公民は9月から実施する。内容や量は教科によって異なり、数学では自作のプリントの配布、英語では問題集の該当ページを指定するという具合だ。希望制ではあるが、現在は半数以上の生徒が受けている。

提出された課題は基本的に翌日に返却する。負担は大きいですが、生徒が自分のつまずきを翌日には検証でき、学びに向かえる意義は大きい。教師にとっても、生徒の最後の「伸び」を把握し、支援できるなどメリットも多い。

出願校が最終的に決まる12月頃からは、過去問題や小論文の添削も行う。量が増えるため、1・2年生の教師も協力し、大学ごとに担当を割り振るなど手分けをして指導する。

「添削指導を通して受験直前の生徒の学力や自校の生徒の傾向を踏まえた上で入試問題分析が出来るのは、1・2年生の教師にとっても大きなプラスです。つまりよくポイントが分かり、授業改善にも生かされます。特に若手教師にとつて、添削指導は生徒理解や指導の幅を広げるきっかけになります」（紺矢先生）

添削プリントは、3年生の教室の近くに置いてある。ある時、3年生の人数に十分足りる枚数を用意したはずなのに、数学のプリントが足りなくなったことがあった。調べてみると、2年生の成績上位層が自主的に取り組んでいたことが分かり、2年生の希望者にも数学と英語の添削指導を始めるようになった。

## 低学年から「受験は団体戦」を意識的に伝える

1・2年生の学力向上策としては、朝自習や終礼プリント、週末課題が中心となる。1学年主任の田中真治先生は次のように話す。

「本年度の1年生は数学に課題が見られたので、数学強化月間を設け、朝学習だけでなく、終礼時10分間で終礼プリントを行いました。毎日、取り組むことで着実に学力が上がると共に、数学への意識も高まりました。年間方針はありますが、学年や時期による課題に応じて取り組みを変化させています」

3年生になって学習に積極的に取り組めるようになる背景には、低学年での志望を高める取り組みがある。大学教員を招いた学部説明会や卒業生による講演を頻繁に実施。1年生から大学の研究内容などを具体的に説明し、偏差値だけではない志望大選びを促す。

「生徒はどのような大学があるのかわからず、教師が大学について具体的に教えないと志望や目標を持てません。大学の魅力を伝え、十分に志望が実現できることを伝え、喜んで目標を持つようになります」（田中先生）

また、「受験は団体戦」という意識も低学年から醸成していく。

「生徒には『学校の風景の一部になろう』とよく言います。決まった時間に決まった場所で学習する大切さと共に、学校で仲間と切磋琢磨し、学んだ方が効率的であることを伝えています。こうした指導は生徒の心に伝わり、自習室で学ぶ生徒は飛躍的に増えました。出願後も、ほぼ全ての生徒が登校して来ることも、学校への信頼感の高まりを象徴していると思います」（紺矢先生）

## 手を掛けるほど生徒は伸びるほど実感

改革の成果は、05（平成17）年度に国公立大現役合格者が初めて200人を超えたことにも

表れている。今後の課題は、取り組みを形骸化させず、常に進化させていくことだ。例年、学年会の中で数人が一つ下の学年に残り、前年の取り組みを継承しながら、改善を加えてきた。

「現在の『小松メソッド』は完成形ではありません。学校を良くしたいというスピリットを継承しながら、メソッドは生徒の実態に合わせて変え続ける必要があると考えています」（紺矢先生）

その言葉通り、メソッドは進化している。従来、数学は1・2年生での進度を出るだけ早め、3年生で受験に向けた対策に重点を置くという流れだった。ところが、東京大や京都大などの難関大の入試問題は、3年生になってから「考えさせる指導」をしても太刀打ちできないケースが多い。そこで、11（平成23）年度からは1年生から考えさせる指導に重点を置くなど、より早期の対策を取り入れ始めた。

また、近年は素直で教師の話をよく聞く生徒は多いが、今後は生徒たちの知的好奇心を一層喚起し、これまで以上に主体性を育んでいくことが課題であるという。

「手を掛けるほど生徒は伸びる。改革を通じて、そのことを実感しました。潜在能力の高い生徒が多いため、教師がもっと知的好奇心を掘り起こせると考えています。教育の原点である授業を通していかに取り組んでいくかを探っていきたいと思います」（紺矢先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年6月号指導変革の軌跡「三重県立四日市高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎幼きイエス会（旧サン・モール修道会）を基に、福岡女子商業高校として開校。1954（昭和29）年に小学校を開校し、幼・小・中・高の総合学園となる。校訓は「徳においては純真に」「義務においては堅実に」。国際交流や国際理解教育が盛んで、世界13か国、国内外に約150校の姉妹校がある。

設立

1933（昭和8）年

形態

全日制／普通科／女子

生徒数

1学年約200人（昨年度卒業生147人）

11年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、東京大、京都大、九州大などに24人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、福岡大などに延べ228人が合格。海外の大学には、ハーバード大やペンシルベニア大などに延べ22人が合格。

住所

〒810-0027  
福岡県福岡市中央区御所ヶ谷7-1

電話

092-531-0438

Web Site

<http://www.fukuokafutaba.ed.jp/>

福岡県・私立  
福岡雙葉中学・高校

進学実績向上

# 「志」を重視する教育で 基礎学力の定着と 進路意識の向上を図る

変革のステップ

背景

◎女子教育に定評はあったが、進路指導は教師個々に任せられ、指導の方向性がそろっていなかった

STEP 1

実践

◎「グローバルシティズン」を目指す人物像として明確化し、共有。生徒の志を育むと共に、学力向上を図る

STEP 2

成果

◎生徒が具体的な将来像を描けるようになり、受験は通過点と考えられるように。上位層から下位層まで学力が向上

STEP 3

指導の方向をそろえるために  
育てたい人物像を明確化し共有

福岡市の中心部にある福岡雙葉中学・高校は、キリスト教精神に基づいた教育を実践する私立の女子校だ。中高一貫コースに加え、高校からの3年課程のコースもあり、約1100人の生徒が学んでいる。

同校は、以前から女子教育について地域からの厚い信頼が寄せられていたが、進路指導はそれほど組織的に行われてこなかった。その体制が、2008年度に始まった教育改革によって大きく変わりつつある。大林興一校長は次のように話す。

「社会の急速な変化を踏まえると、本校の伝統である人格教育は不変の教育として続ける一方で、時代の変化に対応した『本物の学力』を育てていく必要性を感じています。そのような素質を備えた人物を『グローバルシティズン』という言葉で表し、13年度に迎える創立80周年を目指して教育改革を進めていきます」

教師は熱意を持って教育に当たっているが、それぞれの指導が「点」になってしまい、「線」としてつながらないという課題があった。「グローバルシティズン」を設定した背景には、教師間で理想的な人物像を共有して、指導のベクトルをそろえたいという考えもあった。

## 将来への高い志や ビジョンを育む「志の教育」

同校は「グローバルシテイズン」を「神の恵みに感謝して、地球社会の一員であることを自覚し行動する人」と定義する。このような生徒



福岡雙葉中学・高校校長  
**大林興一** Obayashi Kotchi

教職歴50年。同校に赴任して6年目。「常に生徒を中心に据えての教育の在り方を追求し、改善し続ける」



福岡雙葉中学・高校  
**長祐子** Osa Yuko

教職歴27年。同校に赴任して17年目。進路指導部長。「未来を想え！ We shall go together!」生徒の能力開発を常に目指す



福岡雙葉中学・高校  
**田島徳己** Tashima Tokumi

教職歴・赴任歴共に3年。進路指導部副部長。「長空は白雲が飛ぶを妨げず」生徒の可能性を最大限に伸ばす



福岡雙葉中学・高校  
**中村道彦** Nakamura Michiko

教職歴3年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「将来の自己実現に向けて、「本気でやる子」を育てる」



福岡雙葉中学・高校  
**中尾祐美子** Nakao Yumiko

教職歴10年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「目標を持って努力し続けることの大切さを伝えたい」

を育てるために、中高一貫コースでは、中学1年生は「基礎期」として基本的な生活習慣の確立、中学2・3年生は「充実期」として自主的行動の確立、高校1・2年生は「発展期」として自律の実践、高校3年生は「完成期」として進路対策に重点を置く。3年課程では、高校1年生が「基礎期」、2年生が「発展期」、3年生が「完成期」に当たる。今回は、主に3年課程の内容を中心に取り上げる（P.22図）。

「グローバルシテイズン」を育てる教育は、正課の学習活動に加え、「志の教育」が中心となる。進路指導部長の長祐子先生は、次のように説明する。

『「大学入試で終わりの人」ではなく、『大学入試からの人』になってほしいと考え、高い志や具体的なビジョンを育む教育プログラム『志の教育』を行っています。大学入試はゴールではなく、グローバルシテイズンに到達するための成長のきっかけとして『利用』すべきものだと考えています』

「志の教育」では、高校1年生は「自己理解」として、自己の職業観を確立させ、その手前にある大学・学部・学科を調べることで、高い志を持たせ、夢の実現に向けた気概を養う。2年生は「自己啓発」として、職業や学問領域を探求し、職場や大学などを自分の目で確かめる。3年生は「自己実現」として、目指す大学・学部に向かって努力し、進路を実現させる。

## 「未来からの反射」を通して 現在の自分を見つめ直す

「志の教育」では、将来の理想の姿から現在の自分はどうかあるべきかを考え、「未来からの反射」という視点を特に重視している。高校卒業10年後、20年後となる、28歳、38歳の自分を具体的に想像する機会を何度も設けている。

その一つは、卒業生による学部・学科ガイダンスや職業ガイダンスなどだ。職業ガイダンスでは、弁護士や医師、獣医師、アナウンサーなど、さまざまな分野で活躍する28歳や38歳に近い年齢の卒業生を招き、仕事内容やキャリアについて話してもらう。生徒は同じ校舎で学んだ卒業生を身近な存在と感じ、自分の将来と重ね合わせて講演内容に耳を傾け、将来像を具体的にイメージする。

「二例ですが、臓器移植コーディネーターを務める卒業生が講演をした時は、生徒たちの議論が盛り上がり、講演した卒業生も生徒たちの熱意や医学への関心の高さに驚くほどでした。さまざまな現場で働く人たちの生の声を聞き、社会人がどのような視点で物事を見ているのかを、出来るだけ早い時期に体感してほしいと企画しました」（長先生）

夏休み前と秋の年2回、大学教員を招いての出前講義も実施する。理学、工学、医療保健、人文科学、生活科学などの9分野があり、出前

高校3年間の各学年での目標と主な活動			
	基礎期	発展期	完成期
学年	1年生	2年生	3年生
目標	自主的行動の確立 社会と関わる	自律の実践 進路から進学へ・リーダーシップ	進路対策 自己実現
高い学力	学習目標 基礎学力を身につける	学習活動 学力を蓄え本物にする	実践する力を蓄える
	学習活動 現代世界の学び	日本文化の学び (奈良・京都旅行)	進学に向けて 自己管理能力の完成
	狙い 将来の自分を描き、可能性を高めていくための、 活動の幅を広げていく		グローバルシテイズンの第1歩 としての自己実現を目指す
高い志	自己理解 <調査> 「大学の学部・学科について 調べる」	自己啓発 <行動> 「学問領域を探索し、自分の 目で大学を確かめる」	自己実現 <実現> 「目指す大学・学部に向かい 努力し、進路を実現させる」
	志の教育 ●興味関心のある学問領域を 探求する(レポート) ●インターネットを利用し、学 部学科の探求(レポート) ●作文コンクール応募 ●ディベート ●出前講義、講演会への参加	●志望の学部・学科・大学を明 確にする ●出前講義、講演会、大学講義 等への参加 ●オープンキャンパスへの参加 ●作文コンクール応募	●実践的な課外講座 ●大学説明会への参加 ●出前講義、講演会への参加

高校3年間の指導の目標を示している。高いコミュニケーション力と豊かな人間性を育み、同時に志を持てるような活動を行う \*学校資料を基に編集部で作成

講義は分野ごとに異なる日程で行われるので、志望分野以外の授業も受けることが可能だ。また、興味・関心の変化に対応するため、教師と相談の上、分野は随時変更することも出来る。同校には、留学生が各学年に常時5〜6人在籍、帰国子女は現在23人在籍している。一般生徒との交流も盛んで、海外にも視野が向きやす

振る舞い、話し方などが目に見えて変化するほか、大学の志望理由書も、『人の役に立ちたい』といった漠然とした内容から、『こういう思いがあるので、この学部に進みたい』などと非常に具体的にになります。そうした生徒の変容を見るたびに、目標を持つことの力の大きさを実感します」

い環境にある。そのため、「志の教育」の一つとして英語スピーチコンテストを実施するなど、語学力やコミュニケーション力を高めながら、海外の大学への進学も積極的に支援する。11年度入試では、ハーバード大をはじめ、22人の生徒が海外の大学に合格した。他にも、作文コンクールへの応募、オープンキャンパスへの参加などを通じて、生徒のキャリア意識を高めている。更に、3年生では生徒の志を高める上で欠かせないのがきめ細かな個別指導だ。進路指導部副部長の田島徳己先生が言う。「教師との対話を繰り返すことで自分の可能性に気づき、明確な目標が出来る、生徒は大きく変わります。姿勢や立ち居

## 90分間の「課外講座」で基礎学力や集中力を養う

志の実現には、通過点として志望大に合格する必要がある。そのための学力向上策の一つが、11年度に本格的に導入した「課外講座」だ。各科目週1回、放課後に実施し、1年生は数学と古典、2年生は数学と理科、3年生は「センター試験対策」「○○大学対策」など大学受験に対応した科目を設けている。講義時間は90分間と、通常行う授業の倍の長さだ。

「最初は時間が長いと感じる生徒もいますが、特に集中力が途切れる様子は見られませんでした。90分間集中して取り組めるようになると学習に対する基礎体力が付き、45分間の授業は短いと感じるようになります。以前よりも授業に集中できるようになり、入試での集中力も養われると考えています」(田島先生)

講座は基礎と応用がある。受講は希望制だが、受講者が80人を超える講座もあるという。進路指導部の中村道彦先生は次のように話す。

「理数系科目に苦手意識を持つ生徒も多く、それだけの理由で進路を選択しがちです。現在、文系2クラス、理系と医歯薬系で3クラスありますが、課外講座では数学や理科をより多く取り上げ、基礎学力を定着させると共に、考え方に重点を置いて指導しています」

課外講座では、学校独自の教材を使い、考え

る力の育成に努める。例えば、「今1年生で習っているこの分野は、3年生のこの分野の下地になる」などと、先を見せながら指導するように心掛けている。

課外講座の効果は大きく、特に数学では1年生7月の模試の結果が上昇した。基礎学力が定着して全体的に底上げされただけではなく、上位層の学力も高まったという。

「生徒からは、『普段の授業をより理解できるようになった』『難しいけれど楽しい』といった声が多く聞かれます。考える力の育成を重視していることが、考えることを嫌がらずに主体的に学べている理由だと思えます。難関大の入試問題は考える耐性がないと解けませんから、こうした姿勢が身に付いているのはとても喜ばしいことです」(中村先生)

## 生徒が自分の限界を広げる 1年生夏休みの「宿泊学習会」

学力向上の取り組みで土台の一つとなるのが、1年生の夏休みに3泊4日で行う宿泊学習会だ。国語・数学・英語の習熟度別授業や自習を行い、翌朝テストをするのが基本的な流れだ。朝の散策の時間以外、授業や自習、テストなどで、1日10時間以上も机に向かう。進路指導部の中尾祐美子先生が話す。

「学習した内容についてすぐにテストをす

るのは、実践的な勉強により成果が表れることを実感させるためです」

テスト結果などを踏まえ、個々の生徒に合った学習方法を指導するのも特徴だ。同校にはコツコツと頑張る生徒が多いが、中には学習方法が不適切でなかなか成績が上がらないこともあるという。それを1年生のうちには是正し、その後の学習の効果を高めるためだ。

宿泊学習会では、グループに分かれて学習し、成績優秀なグループを表彰する。これにより競争意識が芽生え、グループの中で授業後などに自然と教え合う姿が見られた。

「個人ではなく、皆で一緒に学習する雰囲気をつくることで学習効果も高まったようです。それを実感してか、教え合う姿はその後の授業でも定着しました」(中尾先生)

宿泊学習会は、11年度が初めての試みだった。そのため当初は、「どうして私たちの学年だけ、こんなに勉強をしなくてはならないのか」といった不満の声も上がったそう。しかし、終えてみると、「こんなに勉強をしたのは初めて」と、ほとんどの生徒が大きな達成感を抱いていた。

「『最初は嫌だったけれど、今ではもつとここで勉強したい』『夏休みの宿題も頑張りたい』といった感想が聞かれました。教師にとっては大変な部分もありましたが、苦しいけれども頑張り抜く、普段とは異なる生徒の姿を見られたのは大きなプラスでした。初回な

ので手探りの取り組みでしたが、学年団の反省会では『本当にやって良かった』と、生徒の成長を喜び合いました」(中村先生)

生徒がどこまでやれるのかを教師が知ったことで、その後の指導の指針が出来たという。

「私たちが思っているよりも生徒は柔軟に対応できる力があると感じました。生徒は自分の力を『これくらいだろう』と考え、自身で枠をつくってしまいがちですが、その枠を教師が外してあげると、どんどん伸びていくことを改めて実感しました」(長先生)

## 教師自身が成長して 「グローバルシテイズン」になる

現在、学園が課題と捉えているのが、教師自身の成長だ。長先生は次のように話す。

「素晴らしい生徒を育てるには、特定の教師だけではなく、新人教育などで若手教師のスキルや意識も十分に高め、全ての教師が指導力を発揮する必要があります。誰でも応用できるマニュアルを整えることも大切ですが、それよりも教師自身が感性や志を持って教育に取り組むことが必要です。校長が日頃から言っています、教師がグローバルシテイズンとして成長していくことが、今後、本校の教育をますます高めていくことにつながると考えています」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「東京都・私立吉祥女子中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



岡山県立  
矢掛高校

学校改革

# 生徒・教師の意識を改革 「やかげ学」を軸に 学校の特徴化を図る

◎旧制矢掛中学校として開校し、創立110周年を迎える伝統校。2004年度、岡山県立矢掛商業高校と再編整備され、現在の形となった。11年度に「地域ビジネス科」を新設。普通科は「探究」「総合」の2コースがある。校訓は「至誠力行」。

<b>設立</b>	1902(明治35)年
<b>形態</b>	全日制・単位制(11年度2年生まで)・学年制(11年度1年生から)／普通科・地域ビジネス科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約160人
<b>11年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立は、岡山大、香川大、鳥取大、島根大、山口大、岡山県立大、福山市立大などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、ノートルダム清心女子大、岡山理科大などに延べ74人が合格。
<b>住所</b>	〒714-1201 岡山県小田郡矢掛町矢掛1776-2
<b>電話</b>	0866-82-0045
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.yakage.okayama-c.ed.jp/">http://www.yakage.okayama-c.ed.jp/</a>

変革のステップ

背景

◎再編整備に伴って多様な意識の生徒が混在。学校目標の不明瞭さなどから、地域からの生徒の流出が顕著に

実践

◎進路別に3つの科・コースを設置し、「やかげ学」などの改革を断行。教師全員で学校目標を考えるなど意識改革にも着手

成果

◎生徒に学習意欲の高まりやマナーの向上が見られ、教師の意識も変わる。地域との連携も深まる

「再編当時、本校には国公立大志望から就職希望まで、さまざまな進路希望を持つ生徒が各クラスに混在していました。学校として目指す生徒像は何か、どの学力層に焦点を当てて授業をすれば良いのか、校内の共通理解を図るのが難しかったようです」

学校目標が明確でない上に、再編後、生徒の目的意識の欠如や学習意欲の低下が見られ、学力の高い地元の中学生は町外の進学校を選ぶよ

先生は、当時の様子を次のように聞いたと話す。

「再編当時、本校には国公立大志望から就職希望まで、さまざまな進路希望を持つ生徒が各クラスに混在していました。学校として目指す生徒像は何か、どの学力層に焦点を当てて授業をすれば良いのか、校内の共通理解を図るのが難しかったようです」

岡山県立矢掛高校のこの数年間は、新しい学校に生まれ変わるために次々と改革を行い、もがいた時期だった。その端緒は、2004年度に岡山県立矢掛商業高校と統合し、新しい矢掛高校が誕生したことであった。

同校は岡山県西部の中山間地域に位置し、高齢化や過疎化といった課題を抱える地域にある。旧矢掛商業高校は定員を満たしていたが、旧矢掛高校は再編までの過去5年ほどは定員割れが続いていた。03年4月に教育委員会と両校の教師から成る「開校準備委員会」が発足。普通科と商業科をそのまま残すのか、単位制高校とするのかなど検討を重ねた結果、1学年5学級の単位制普通科高校として再出発することになった。3年前に赴任した教務課長の石田桂子先生は、当時の様子を次のように聞いたと話す。

岡山県立矢掛高校のこの数年間は、新しい学校に生まれ変わるために次々と改革を行い、もがいた時期だった。その端緒は、2004年度に岡山県立矢掛商業高校と統合し、新しい矢掛高校が誕生したことであった。

同校は岡山県西部の中山間地域に位置し、高齢化や過疎化といった課題を抱える地域にある。旧矢掛商業高校は定員を満たしていたが、旧矢掛高校は再編までの過去5年ほどは定員割れが続いていた。03年4月に教育委員会と両校の教師から成る「開校準備委員会」が発足。普通科と商業科をそのまま残すのか、単位制高校とするのかなど検討を重ねた結果、1学年5学級の単位制普通科高校として再出発することになった。3年前に赴任した教務課長の石田桂子先生は、当時の様子を次のように聞いたと話す。

再編後、学校目標のあいまいさから地域からの信頼が低下

うになった。

しかし、国公立大合格者数は再編前と変わらない15〜20人を維持しており、特に日常の授業が成立しないような荒れた状態に陥っていたわけではなかった。一部の生徒の行動によって、地域の間で悪いイメージが先行してしまったのだ。



岡山県立矢掛高校教頭  
**森本裕文** Morimoto Hirofumi  
同校に赴任して3年目。「可能性を信じて『鉄は熱いうちに打て』」



岡山県立矢掛高校  
**石田桂子** Ishida Keiko  
同校に赴任して3年目。教務課長。「かけがえない命を大切にし、『自立・自律』が出来るようになり合っていきたい」



岡山県立矢掛高校  
**濱田好宏** Hamada Yoshihiro  
同校に赴任して4年目。総務課長、総合コース主任。「教師は偉大なる『馬鹿』になれ」



岡山県立矢掛高校  
**加本英人** Kamoto Hideto  
同校に赴任して1年目。進路課長。「何事も『諦めない』こと」



岡山県立矢掛高校  
**室貴由輝** Muro Takayuki  
同校に赴任して6年目。環境科主任、生徒課、「持続発展教育」で全ての学びがつながることを、生徒に実感させたい」

## 「探究」「総合」「ビジネス」の3コース制を導入

地域からの信頼を取り戻すため、同校は改革に着手した。まず、学びの目標を分かりやすくして特色を打ち出そうと、09年度に「探究」「総合」「ビジネス」の3コース制を導入した。しかし、当時を知る濱田好宏先生は、中学校や塾へのコース説明は苦戦の連続だったと話す。

「中学校や塾の先生、保護者からは『探究コースが目指すのは、国公立大の一般入試か、それとも推薦入試か』と問われました。いずれは一般入試に対応できる学力を付けるコースにしたいと考えていましたが、当時はAO入試や推薦入試で合格する生徒が多く、どう説明すべきか迷いました。また、総合コースは当初、就職に対応すると説明していましたが、次年度には『就職を目指すならビジネスコース』と説明するような状況でした。教育目標が定まらず、各コースの特徴が明確でないまま、生徒募集をしている状況でした」

こうした試行錯誤を経て、10年度には、国立大進学を目指す「探究コース」、進学を柱に幅広い進路に対応する「総合コース」、資格取得から進路を開拓する「ビジネスコース」という特色を明示した。しかし、特色が分かりやすく、生徒に目的意識を持たせやすい探究とビジネスの両コースに比べ、総合コースは依然とし

て目標が分かりにくいものだった。その結果、高校入学時に進路目標が明確でない生徒は総合コースに集まってしまい、その生徒たちの学習意欲を高めることが大きな課題となっていた。

## 「やかげ学」で生徒の意欲を高め地域の活性化も図る

そうした折、室貴由輝先生が中心となって実施していた学校設定教科「環境」の中から、地域連携やボランティア活動に関する部分を発展させた「やかげ学」を考案し、実現に向けて動くことになった。

「当時、探究コースは進路課、ビジネスコースは商業科の教師が中心となり、進路指導を行っていました。目的意識が希薄な生徒の多い総合コースは、私の所属する生徒課が中心となり計画を立てていました。生徒に目的意識を持たせ、規律ある学校生活を送らせるにはどうしたら良いかと考えた結果、自分たちの学校のある町のことを知り、学校外の人と触れ合うことで、生徒は変われるのではないかと考えました。町の規模はそれほど大きくなく、学校から近い所に生徒を受け入れてくれそうな施設がいくつかありました。町外からの通学者が半数を占めることもあり、矢掛町のことを勉強しながら将来を考えていく機会にしたいと思ったのです」（室先生）

「やかげ学」は総合コースの学校設定教科として設け、生徒が地域の幼稚園や小学校、高齢者施設、農業体験施設などで活動することを柱とする内容とした。教師が手分けをしてさまざまな施設を訪れてほしいし、十数か所から受け入れの承諾を得た。同校が念を押したのは「インターンシップのように一時的に仕事をするのはなく、『職員』として長期間、生徒に仕事を任せてほしい」ということだ。

「インターンシップは生徒に仕事内容を理解させるのが目的の一つです。生徒にとっっては社会や仕事を知る機会となりますが、受け入れ側は担当者が終始付き添うことになり、仕事が出来ません。長期的に継続するために、先方の負担軽減となるよう、生徒に仕事を任せてほしいと頼んだのです」（室先生）

「やかげ学」が可能となったのは、教育委員会だけでなく、町の協力も大きい。周辺の自治体が相次いで合併する中、矢掛町は合併しない道を選んだ。定住化政策を進め、人口減に歯止めをかける上で、町内に高校が存在する意味は大きく、町として支援するという意図があった。

## 「やかげ学」の成功を生徒の学習意欲や学力にどうつなげるか

「やかげ学」は2・3年生の2年間で行う。毎週1回2時間の授業で、2年生1学期は矢掛町

を知ることと実習に向けたガイダンス、2年生の9月から3年生7月にかけて実習（図）、9月から報告書作成などのまとめの作業に入る。実習先は、2年生1学期の「やかげ学」の定期考查の結果を考慮して決める。

「実習先と定期考查の結果を関連付けているのは、社会では努力して成果を出さないと認めてもらえないことを伝えるためです。『やかげ学』の定期考查は、授業を真面目に聞き、ノートを取っていれば分かる問題ばかりです。教科の学力は振るわなくても、『やかげ学』の成績は良く、希望した実習先でも生き生きと活動している生徒もいます」（室先生）

受け入れ先での生徒たちの評価は、予想以上に高かった。幼稚園からは「子どもの昼寝を見てもらう間に、職員会議を開けるようになった」、特別支援学級からは「子どもと一緒に遊んでくれて、教師の体力的な負担軽減になった」といった声が寄せられた。初年度を終え、「次

図 「やかげ学」の活動報告書

やかげ学 活動報告書			
活動日	月 日 本曜日	活動時間	13時00分～15時45分
活動施設名	ちかっま荘	施設担当者	
報告者名	年 組 番 氏名		
本時の活動目標 自分から進んで学びたい			
本時の活動内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・洗面所掃除</li> <li>・ゴミの分別</li> <li>・机の拭き掃除</li> <li>・机の消毒</li> <li>・机の整理</li> <li>・机の掃除</li> </ul>			
自己評価 よくできた…3 できた…2 あまりできなかった…1 できなかった…0			
1. 本時の目標を達成する	3	2. 時間を守って活動する	3
3. 積極的に活動に取り組む	2	4. きまりやマナーを守って活動する	3
5. 必要に応じて報告・連絡・相談を行う	3	6. 活動の質を高める工夫をする	2
7. 場面に応じた挨拶をする	2	8. 相手の立場や考え方を理解する	2
9. 立場に応じた接し方を考える	2	10. 自分の考えや意見を正確に伝える	2
		合計	24/30
物に頑張ったこと <p>深い物を誰かから頼みまわると言われた時に自分から進んでしました。深い物のよじ爪は拭き掃除、こぶたの拭き掃除をしました。また、服を畳む手伝い、お茶作りなど今日は何枚かも掃除しました。掃除の時に、この調子で掃除の仕方に慣れていきたいと思います。</p>			
反省事項 <p>作業終了後、ゴミを捨てた時に、ゴミが落ちていました。また、ゴミの分別も、ゴミの分別ができていないので、次回からは注意したいと思います。</p>			

「やかげ学」の活動後には、活動報告書を提出する。活動を振り返って次につなげるだけでなく、文章力や表現力を高めるためでもある  
\*学校資料をそのまま掲載

年度は人数を増やしてほしい」という要望が受け入れ先から上がってきたほどだ。

「生徒は受け入れ先で感謝されることで、自己肯定感が高まっているようです。学校外で人とかがわかることで、社会性やコミュニケーション能力も身に付いたと感じています。更に、受け入れ施設と生徒の相互にメリットがあるようにという目標は、1年目で達成できました」（濱田先生）

同校では実習の際、「やかげ学モード」と言われるほど、生徒の心にスイッチが入る。しかし、普段の授業では必ずしもそうではないことが課題だと、室先生は言う。

「『やかげ学』ではマナーや身だしなみがき

ちんとしているのに校内では出来なかったり、『やかげ学』ほど通常の授業に意欲的になれなかったりする生徒が目立ちます。『やかげ学』での成果が学力や学習意欲につながっていない生徒もいるのです。中には幼稚園や小学校での実習を通し、『将来は幼児教育の道に進みたい』と目的意識を持ち、学習意欲につながっている生徒もいますが、まだ少数です。学習でも生活指導でも生徒にもう少し負荷をかけることで、もっと力を引き出せるのではないかと感じています」

また、教師の異動があっても「やかげ学」を継続できる仕組みづくりも今後の課題だ。それを見越して、実習期間が9月から翌年7月までと年度をまたぐような工夫もしている。

「『やかげ学』のシステムは出来上がりつつあります。システムを形骸化させないためにも、多くの教師が『やかげ学』の意義を理解し、取り組みに思いを込めていくことが必要だと感じています」（石田先生）

## チームとして 危機に立ち向かう意識改革

「やかげ学」の成功について、森本裕文教頭は次のように話す。

「『やかげ学』を始めた課題意識は、総合コースだけでなく学校全体が抱えるものです。

学校を変えるには、まず教師が危機感を共有しなければなりません。しかし、毎年、異動のある教師集団に共通の当事者意識を持たせるのは難しいのが現状です。危機感を共有するために、目標を皆でつくり、達成のための手立てを皆で考え、『考えるチーム』をつくりたいと思います」

同校はSWOT分析を用いて、学校の強み（S）、校内の弱み（W）、校外の機会（O）、校外の脅威（T）を洗い出した。その上で重点目標に「学力向上への組織的取り組みを継続できる学校」を掲げた。11年度当初には、その目標を各課、各学年、各教科の目標、更には自己目標シートに落とし込んだ。現状のチェックから始めたこの取り組みを「CAPD」サイクルで回していく考えた。加えて、授業改革にも取り組む。

「以前は、他教科や他学年がどのような内容、進度、深さで授業を進めているか、教師間の共有が弱かったようです。研究授業を行いながら、こうした情報を各教科で共有する時間を取ってもらっています」（石田先生）

取り組みを始めて間もないが、職員室での会話の中心は少しずつ変わってきたという。

「課題の量や未提出者への対応についての話題が増えてきました」（森本教頭）

今後は、国公立大合格実績の向上を目指したいと加本英人先生は話す。

「国公立大の合格実績は地域からの評価を

得るための重要な要素で、目安は1学年2割と考えています。探究コースでは、入学時から学習習慣の確立に力を入れ、学習合宿や個別面談などで生徒一人ひとりにきめ細かな指導を徹底していますが、今後はそれだけでなく、総合コースの進学実績を上げる工夫が必要で、進路目標を達成し、地域から信頼される高校として踏ん張っていくのが、私たちの使命だと思っています」

一方、目標が明確であるビジネスコースにも、課題が浮上していた。商業科目の選択者数が年度によって十数人から50人以上と大きく変動する点だ。また、普通科の中にあるビジネスコースでは特色を十分に生かせないため、11年度、「地域ビジネス科」に独立させた。

「ビジネスコースは11年度のコース制完成後に改組すべきという考えもありましたが、改革の歩みを止めるべきではないと考え、新学科設置に踏み切りました」（森本教頭）

再編整備から8年経った。旧矢掛商業高校の最後の3年生が卒業したのは06年3月。その学年主任を務めていたのが室先生だった。

「学校を閉じることがあれほど寂しいことだとは思いませんでした。あのようないは二度と繰り返したくありません」（室先生）

旧矢掛商業高校の卒業生や教師たち、そして町の思いも背負い、全国の中山間地域が抱える課題にこれからも立ち向かい続けていく。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年2月号指導変革の軌跡「熊本県立高森高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

# 30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「分かりやすい授業」を超え、  
「生徒がもっと学びたくなる」授業へ

石川県立金沢桜丘高校

前田昌寛先生

36歳

## 私が乗り越えてきたもの

### 進学校の生徒にも評価された授業

29歳の時、進路多様校から金沢桜丘高校に赴任しました。最初の授業では、生徒が始業時に既に準備していることに驚きました。実際に授業を始めると、生徒は私の言葉にしっかり耳を傾けてくれる。授業のしやすさと同時に、プレッシャーを感じました。

私の理想は「分かりやすい授業」でした。また、前任校での経験から「楽しさ」を大切にしてきた私は、ゲーム的な活動も授業に取り入れました。そして、赴任当時は校内でただ一人のオーリイングリッシュによる授業。英語への情

熱を生徒にぶつけるような授業だったと思います。生徒の授業評価も決して悪くはありませんでした。

### 考えさせる授業になっていない

ところが赴任4年目、1年生の授業で出来るだけ分かりやすいように時間を掛けて丁寧に英語で説明する私の耳に、「ヒマヤ……」という声が飛び込んできたのです。一番前の席の男子生徒がつぶやいたそのひと言に対して、私は何も言い返せませんでした。楽しくて、分かりやすく、熱意の伝わる授業をしたいと思っ

## 授業で懸命に説明する私が聞いた「ヒマヤ」の声

た。しかし、それだけで生徒の中に学問的な興味や、自分で学ぼうとする気持ちは生むことが出来るのか、私は深くは考えていませんでした。英語で授業をしたことに満足し、生徒の様子をしっかりと見取った上で、生徒を引き込む指導が出来ていなかったのです。更に、1年生の時は積極的に授業に参加していたのに、2年生になると急に声が出なくなる生徒が増えていることに気が付きました。生徒が成長し、「楽しい」と感じる事柄が変わっていたことをつかめていなかったのです。授業後、職員室に戻っては「表面的な楽しさだけでは、生徒は引き付けられないですね……」と周囲の先生にこぼす日々が続きました。



まえだまさひろ ◎教職歴13年。同校赴任6年目。担当教科は英語。英語教育推進室所属。  
石川県立金沢桜丘高校 ◎全日制/普通科/共学。  
11年度入試では、国公立大は、北海道大、筑波大、一橋大、金沢大、名古屋大、大阪大などに計229人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ522人が合格。

「正解を探す授業」からの脱却

説明が一方的にならないように気を付けたり、ペアやグループ活動を取り入れたり、試行錯誤が続きました。

同じ頃、本校は文部科学省の「英語教育改善のための調査研究」事業（当時）の指定を受け、新カリキュラムの下、英語による指導法の開発を始めました。難しい社会問題が課題文として取り上げられると、私はそれまで以上に「どうすれば分かりやすく説明できるか」を考えようと思いました。しかし、真に楽しい授業とは何かを考えたり、それは生徒が自分の考えを話したくなるような授業ではないかと思ったので

す。そして、授業で「正解を探す」のではなく、正解のない問いを生徒に投げ掛けてみようと思いました。

英文の訳し方や構造を生徒に質問し、筆者の言いたいことを効率的に探して当てるといった作業に終始するのはなく、この英文を読む意義を生徒に投げ掛け、生徒それぞれの答えを引き出すことを授業の中心に据えるようになりました。だから、生徒には「この授業は正解を出すことが目的ではない。したがって間違った答えもない」と話しています。もちろん、生徒が文法的に間違った英語を使うこともありま

ちに正確な英語にたどり着きます。

社会では、答えが一つではない中でコミュニケーションを図り、他者の考えを聞きながら自分の意見を整理することがほとんどです。授業にその過程を取り入れることで、道具としての英語を使う訓練になると考えたのです。

これまでと異なるスタイルの授業に生徒が集中し、「もう授業が終わったの？」という声が教室で聞こえた時には、大きな達成感を覚えました。

教師の人間力が問われる授業

教師が用意した正解を探す授業からの脱却を目指した結果、私の経験不足のため授業がうまくいかないこともあります。授業で取り上げるテーマにつ

「もう授業は終わり？」の声に達成感を味わう

いて私が十分勉強し、多面的に理解していないと、生徒の意見をくみ取って授業を展開することが出来ないからです。だから、授業の準備も様変わりしました。机の上での教材研究だけでなく、普段の生活の中で社会問題などに対して「自分ならどう考えるか」を自問することが多くなったと思います。教科の知識以上に、一人の人間としていろいろな経験をすることが授業で生きてくるのだと実感しています。

一人の生徒の意見を基にクラスみんな議論し、視野を広げ、考えを深められたときは、とても楽しいものです。これからも生徒の表情やひと言を真摯に受け止めながら、教師としての成長を模索し続けたいと思います。

前田先生 の 授業実践



Q&A

Q 日々の授業で、生徒を引き込むために特別に気を付けていることはありますか？

A 私は「授業は最初の3分間が肝心」だと思っています。スムーズに英語を学ぶ意識に切り替え、学習内容に関心を向けさせることが重要だからです。そこで私は、出来るだけ授業の冒頭に関連する写真や資料を見せるようにしています。生徒に「先生はなぜこれを持ってきたのだろう」と考えさせることが出来れば、その瞬間関心はこちらに向いているわけです。関心を向ける材料がない時は、導入時に小テストを用いて気持ちを切り替えさせます。英語の授業に入る姿勢をつくらせることが大切なのです。

Q 生徒に考えさせ、コミュニケーションを重視する授業になってから、授業での取り組みも変わりましたか？

A 教師が説明することよりも、生徒が活動することを重視するようになったことで、「授業の時間は、ペアワークなど授業でしか出来ないことをする」という意識が強くなりました。基本的に授業では予習は求めず、その代わりに、自宅に帰ってから復習をしっかり行うように声を掛けています。授業で出てきた表現を覚えたり、今日自分が考えたことを改めて振り返ったりしておくように話しています。学校の授業ですべきことは何かを考えて、指導を構築したいと思っています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す前田昌寛先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、前田先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

[view21\\_since-1975@mail.benesse.co.jp](mailto:view21_since-1975@mail.benesse.co.jp)

# 中だるみの2年生から 学校を支える2年生へ

2年生0学期  
の使い方

## 時期の特徴

文理選択が終わり、生徒、保護者ともに一安心している。行事なども多いため面談の時間が取りにくく、保護者と密に連絡を取ることも難しくなる。

## 指導のポイント

入試業務などで生徒や保護者との接点が少なくなる中で最大の効果を発揮するため、保護者を「チームの一員」として巻き込み、2年生に向けて生徒の力を伸ばす。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

## 目的別データ活用

### 1 2年生が中核となる 学校生活や 行事の意義を示す

……→ 図1

◎2年生になると高校生活への慣れや多忙さから、学習習慣や生活習慣が乱れる生徒が出やすい。また、そのような子どもの変化を機に、保護者の学校に対する不満が大きくなることもある。保護者にも進級前に、2年生とはどんな学年なのか、学校はどのような方針で指導を行っているのかを伝えておきたい。この時期から2年生の5月、6月頃まで保護者と学校の接点は少なくなるため、学校とのつながりを途絶えさせない情報発信が必要だ。学校の姿勢を理解してもらうことで、教師、保護者がチームとなって2年生になる生徒の力を伸ばしていくことをねらう。

### 2 卒業生の体験から、 2年生の在り方を 浸透させる

……→ 図2

◎本来2年生は、中だるみの時期ではなく、学校の中核となって活躍する時期である。理想とする2年生像を保護者に伝えることで、保護者に2年生となった我が子のかかわり方をイメージしてもらおう。そこで、卒業生の体験談などを用いて「授業中心の学習に取り組んでいたので、部活動や行事に熱中しても結果的に志望校に合格することが出来た」といったエピソードを紹介する。このような先を見通した発信により、2年生では何を大切にすべきかを保護者に伝えることが出来る。保護者と共に、目指すべき「2年生像」を追究していきたい。

対保護者  
への  
データ

目指すべき「2年生像」を共有し  
保護者を「チームの一員」に巻き込む

## データを用いた指導の流れ

### STEP 1

◎2年次に行われる行事の意義を学年団で洗い出し、保護者に協力をお願いする内容をすり合わせる（図1）

### STEP 2

◎合格体験記を保護者向けにアレンジし、一覧化する。体験記が蓄積されていない学校では合格の決まった3年生にヒアリングを行う（図2）

### STEP 3

◎図1、図2を学年団で共有し、自校の2年生の在り方について改めて目線を合わせる

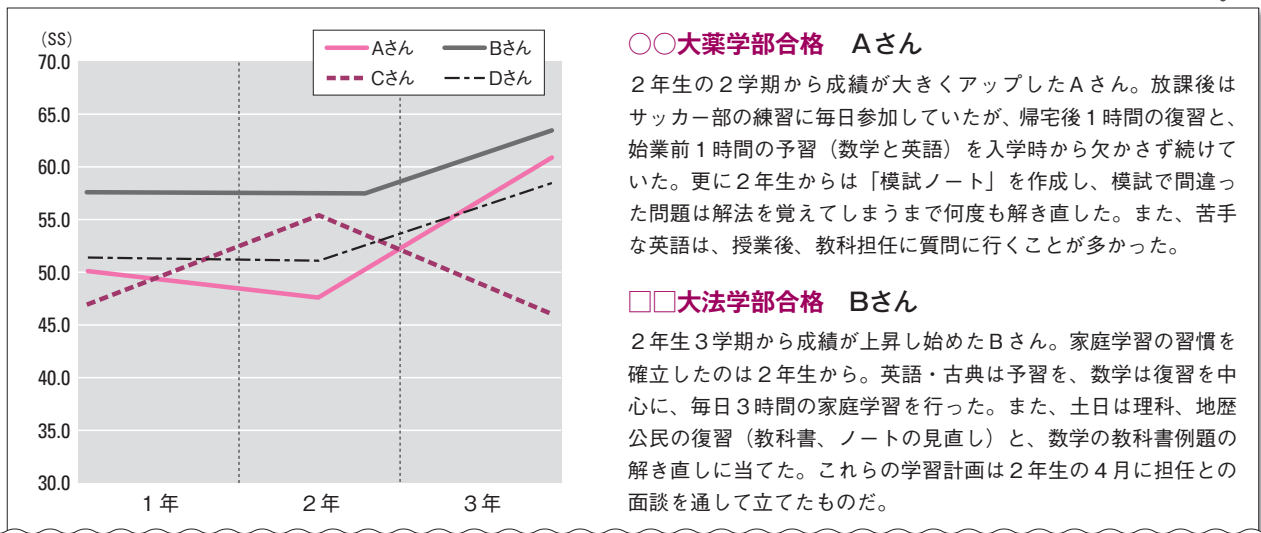
### STEP 4

◎図1と図2を学年通信や学校 Web サイトに掲載し、保護者に対して2年生1学期をより良く迎えるための準備を促す

図1 保護者向け「2年生の意義」確認シート

	1年生との違いと2年生の意義	保護者へのお願い
部活動	後輩たちを引っ張りながら、自分たちの力で集団を高めていく。	大会や発表会前に部活動中心の生活になってしまうのは、集団に対する責任を全うしようとしている表れでもあります。人間的成長と捉えて応援してあげてください。ただ、食事と一緒に取る、決められた家事手伝いをするなど、それぞれの家庭のルールはきちんと守らせて、家族との生活も集団生活の一つであることを教えてください。
	目標に向けてやり抜くエネルギーを、学習にも向けていく。	部活動を大切にしながら、最低限の家庭学習は続けるように指導します。家庭学習に取り組む様子を目にしたら「疲れていてもきちんと勉強に取り組んでいる」ことを評価して、声を掛けてあげてください。
模試・実力テスト	苦手科目・分野を具体的に把握する。	模試の目的の一つに、苦手科目や分野を発見し、その克服に着手するということがあります。結果に一喜一憂するよりも、模試の結果を踏まえて、学習計画を見直すことを重視してください。
	志望する大学について視野を広げる。	この時期の合否判定は、目安に過ぎません。むしろ、模試を契機に、自分が進学したい大学、学んでみたい学問を考えることに意味があります。「そんな大学、受かるわけがない」などの言葉は禁物です。
文化祭	集団の力や伝統の大切さを学ぶ。	およそ2か月の準備期間を経て開催される文化祭は、本校の生徒にとって「〇〇高校の生徒」としての…

図2 2年生の大切さを伝える卒業生の体験談



〇〇大薬学部合格 Aさん

2年生の2学期から成績が大きくアップしたAさん。放課後はサッカー部の練習に毎日参加していたが、帰宅後1時間の復習と、始業前1時間の予習(数学と英語)を入学時から欠かさず続けていた。更に2年生からは「模試ノート」を作成し、模試で間違った問題は解法を覚えてしまうまで何度も解き直した。また、苦手の英語は、授業後、教科担任に質問に行くことが多かった。

□□大法学部合格 Bさん

2年生3学期から成績が上昇し始めたBさん。家庭学習の習慣を確立したのは2年生から。英語・古典は予習を、数学は復習を中心に、毎日3時間の家庭学習を行った。また、土日は理科、地歴公民の復習(教科書、ノートの見直し)と、数学の教科書例題の解き直しに当たった。これらの学習計画は2年生の4月に担任との面談を通して立てたものだ。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

保護者との世代ギャップを  
念頭に入試情報を伝える

進級と共に保護者の入試への関心は高まるが、保護者が高校生だった頃と今の進学状況の違いを理解していない保護者もある。保護者に向けて入試の多様化や、カリキュラム、就職支援などにおける大学の個性化について、この時点からしっかりと情報発信を行っておくことが大切だ。志望校を設定していく生徒に寄り添えるような保護者となるよう導きたい。

部活動での保護者の  
つながりを活用する

試合の応援や合宿など、部活動を通して保護者が学校とつながるケースは多い。そこで、クラスや学年でのつながりだけではなく、部活動のつながりも視野に入れて学校への理解を促す手立ても有効だ。部活動顧問を通じて、文理選択後のこの時期の重要性や、2年生になることで生活はどのように変化するかなどを伝え、学習と部活動の両立の重要性などについて理解を促す。

進級が難しい生徒と保護者に  
学年団全体で向き合う

進級が難しい生徒とその保護者に対しては、担任だけではなく学年団で向き合うことが大切だ。特に保護者には、各教科で行ってきた指導とこれからの見通しを話し、生徒のことを学年団全体の問題として捉えてきたことを伝えて、理解と協力を得たい。課題を抱える生徒を学年全体できめ細かく見取り続けることで、いざというときにその学年の集団としての力が発揮できる。

## 目的別データ活用

### 1 文理選択をゴールにさせず進路意識を途切れさせない

……→ 図3

◎生徒は文理選択に向けて進路意識を高める。しかし、文理選択が一段落すると、それで一安心してしまうことも少なくない。文理に分かれて授業が始まる新学期を前にした2年生0学期を「文理の内定期間」と捉えて、文理選択で高まった意識を持続させて学習に向かわせる。具体的な指導としては、模試の帳票を用いて、生徒の弱点や得意科目を洗い出し、それを踏まえた上で家庭学習計画表を作成させる。文理選択の過程を振り返りながら、希望進路においてキーとなる科目を確認することも大切だ。文系・理系の覚悟を持った生徒にするために、何が必要かを考えたい。

### 2 生徒に応じた具体的な声掛けで学習に向かわせる

……→ 図4

◎図3を用いて2年生0学期の計画を立てる際には、可能な限り面談を行い、生徒の家庭学習計画をチェックする。文理選択の過程で設定した志望を目指す上で鍵となる科目と、模試成績から見た2年生になるまでの3か月間に必要な学習を、生徒本人に気付かせ、語らせることが大切だ。だが、中には文理選択での思考の深まりが十分ではなく、言葉が出てこない生徒もいる。そんな生徒には、図4のような「苦手科目を克服する」「得意科目をつくる」という二つの柱を提示し、学習の大きな方針を立てさせると良いだろう。

対生徒  
への  
データ

2年生0学期を「文理の内定期間」として  
進級に備えた学習に着手させる

## データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎模試の成績などから、各生徒の特徴をつかむ。苦手科目についてはどの分野が得意なのかまで把握する	◎志望と現在の学力、頑張るべき科目を踏まえた上で、家庭学習計画表を作成させる(図3)	◎図3を記入させるに際して、生徒の文理選択を踏まえた声掛けを行う(図4)	◎定期的に計画通り学習が進められているかを点検し、2年生進級時にスムーズなスタートを切らせる

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

- 2009年2月号「1年生春休み前後の学習意識の向上」
- 2009年12月号「2年生0学期」を見通した1年生2月までの学習習慣の定着」
- 2010年12月号「目標とのギャップを埋める2年生0学期への意識付け」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用  クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→  
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が  
ダウンロードできます!

生徒指導・  
進路指導  
ツール集

ウェブサイトで  
ダウンロード!

図3 「文理の内定期間」の家庭学習計画

1年 組 氏名 \_\_\_\_\_

●選択した方に○を [ (文系) ・ 理系 ]

●志望大 第1志望 A大学経済学部 第2志望 B大学経済学部

●入試科目 (センター: 国、教、英、地歴公民、理) (センター: 国、教、英、地歴公民、理)  
 (個別: 国、教、英) (個別: 英)

●模試成績から明らかになった「頑張るべき教科・科目」

●頑張って克服する教科・科目 数学 ●頑張ってもっと伸ばす教科・科目 英語

●その学習法

次の模試までに数列を見直す  
定期テストの問題を解き直す

課題プリントを見直す  
き直す

**学習計画を具体的なものにするために**

◎「頑張るべき教科・科目」は模試成績を踏まえて生徒自身が決定するが、学習計画を出来るだけ具体的なものとするために、複数回分の模試の分野別成績を比較して、強化すべき分野を絞り込ませるようにする。模試の価値は結果に一喜一憂することではなく、学習の指針として活用していくことにあることを2年生0学期に理解させたい。

●家庭学習計画

期間	月	日	計
12/5 ~ 12/11	教2 英2	教2 英3以上	教12 英12以上

図4 生徒の文理パターンに応じた声掛け例

文理	生徒の状況	声掛け例
文系	数学・理科が苦手	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎数学や理科を諦めると、教科学力のトータルバランスが必要な国立大進学を難しくしてしまう。進路選択の幅を狭めないためにも、授業中心で勉強を続けよう。</li> <li>◎文系でも数学や理科を課す入試はたくさんある。数学や理科を合格者の平均点レベルをもってこれれば志望実現の可能性は高まるので、苦手分野を克服しよう。</li> </ul>
	苦手科目はないが得意科目もはっきりしない	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎2年生になると、地歴公民の授業も多くなる。地歴公民の中から「これだけは負けない」という得意科目をつくれるよう、1年生で習った内容を復習しよう。</li> <li>◎英語、国語、地歴公民は入試で配点が高い。これらの3教科についてこれまでの模試を解き直し、得点力を上げておくと、得意科目になるかもしれない。</li> </ul>



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

### 現場からのアドバイス (プラスαの指導)

#### 学年の学力傾向を踏まえて 演習問題を絞り込む

進級を前に、1年生の学習範囲の復習用教材を決める。市販の問題集を指定してもよいが、生徒が無理なく最重要ポイントを確認できるよう、教科担任が問題を厳選し、まとめていくとよい。各単元で「重要問題50」更に「重要問題20」など、その学年の学力傾向を踏まえて問題を段階的に絞り込む。基礎基本を生徒に示す学年独自の問題集を作る過程で、教師の指導力も磨かれる。

#### 3か月先を見通して 行動する習慣を養う

2年生0学期の約3か月間の過ごし方によって、2年生4月をより良い状態で迎えられるかどうかが決まる。このように、「今の過ごし方が将来をつくる」「将来を見通して、今の過ごし方を決める」習慣を、生徒に徹底させることも大切だ。2年生になると模試の回数も増え、生徒は結果に一喜一憂がちだ。3か月先の自分を見通し、その間は地道に努力を続けることの大切さを伝えたい。

#### 文理選択は 苦手を捨てる選択ではない

「数学が苦手だから文系を選んだ」など、文理選択の理由を後ろ向きな姿勢で語る生徒は少なくない。しかし、生徒が「捨てた」と考えた教科であっても、志望を精査すると、高配点ではないものの、センター試験などで必要とされている場合は多い。苦手教科とはいえ「捨てる」ことは簡単には出来ない現実を伝えた上で、「今のうちならまだできることがあるはず」と生徒に伝えていく。

### 「有機」をキーワードに太陽電池や液晶の新しい利用法を研究

大阪大大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻 尾崎雅則研究室

最近、人々の関心が高まっている太陽電池。活用のメリットは大きいですが、導入時の費用が高く、普及がなかなか進まないのが現状だ。そうした中、大阪大の尾崎雅則研究室ではコストを大幅に下げ、また持ち運びや曲げ伸ばしが容易な有機素材の太陽電池の開発に取り組んでいる。そのテーマは「有機素材を用いた次世代デバイスの開発」。太陽電池の他にも、液晶をディスプレイ以外に活用する方法を研究するなど、有機素材をさまざまな場面で利用する可能性を追究している。

#### フローチャートで分かる尾崎研究室

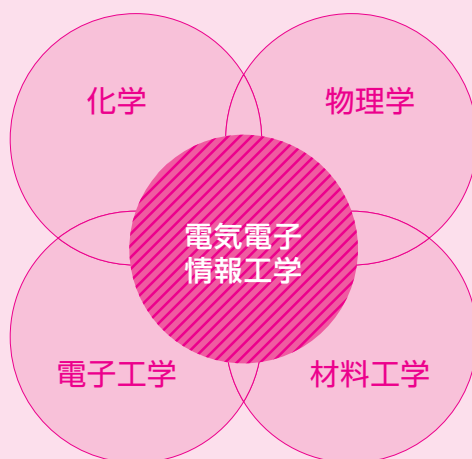
大学院生の  
主な出身分野

工学

など

◎大学院進学者の多くは、学部時代に電気工学を専攻している。また、物理学や化学など理学的な知識も求められる分野。

研究にかかわる  
学問分野と研究内容



◎研究室では、電気電子情報工学の中でも有機エレクトロニクスを研究対象とする。有機の研究には化学の知識が不可欠であり、エレクトロニクスについては物理学の知識も必要となる学際的分野だ。更に、有機材料を用いたデバイス（装置、回路）の開発を行うため、材料科学や材料工学とも深いかわりがある。

研究成果と  
社会のかかわり

有機太陽電池  
の開発

次世代ディスプレイ  
の開発

など

◎有機材料はパソコン、携帯電話、液晶テレビ、LED照明など、さまざまな製品に用いられている。研究室ではすぐに実用化可能な物だけではなく、有機太陽電池など、10～20年先に大きな技術革新をもたらすような研究に取り組む。

## 最後まで諦めない心が研究を成功に導く

電気電子情報工学が求める学生像

研究がうまくいかなくても簡単に諦めない人

「いつかは出来るはず」と前向きに考えられる人

人の話をしっかりと聞き、受け入れることが出来る人

研究活動をしていく上で一番大切なのは、簡単に諦めない心を持つことです。実験は、成功よりも失敗することの方が圧倒的に多いものです。研究では、なぜうまくいかなかったのかを検証し、もう一度仮説を立てて、実験に臨むことの連続です。

ある学生は、卒業研究の発表時期の直前になって、望んだ実験結果が得られずにいました。しかし、彼は粘り強く研究に取り組み、発表の1週間前になってようやく有用なデータを取ることに成功しました。彼の研究成果はすぐに学術誌に掲載できるぐらいレベルの高いもので、事実、論文は大きな反響を呼びました。もし彼が途中で諦めていたら、成果を手にするのは出来なかったわけです。失敗が続くと苦しいものですが、「きっといつかは成功するはずだ」という前向きな気持ちを持てることも大切です。

そして、研究は一人で取り組むものではなく、たくさんの仲間の協力があって成り立つものです。相手の意見やアイデアにしっかりと耳を傾け、受け入れていく姿勢も不可欠となります。

### 高校生へのメッセージ

高校時代の私は、アマチュア無線やラジオ作りに熱中していました。皆さんもスポーツや音楽など、好きなことがあると思います。その好きなことをとことん突き詰めてほしいと思います。「好き」を突き詰めると、その物事の本当の深さや面白さが見えてくるものです。



尾崎雅則

教授 Ozaki Masanori

大阪大学大学院工学研究科電気電子情報工学専攻分子機能材料デバイス領域教授。大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻博士課程修了。大阪大学学部助手、助教授を経て2005年から現職。研究室では液晶、電子・光機能性分子・高分子、分子エレクトロニクスデバイス、分子に基づくフォトリソグラフィ結晶に関する研究などに取り組む。応用物理学会、日本液晶学会、電気学会などに所属。

### 最新の研究テーマ

## 設置費用が安く 軽量の太陽電池の 開発を目指す

私の研究室で今最も力を入れて研究の一つが、有機太陽電池の開発です。

原子力発電は放射性物質をどのようにに管理するかが

問題となっていて、火力発電は多量の二酸化炭素を排出するという事で地球温暖化に対する影響が指摘されています。そこで、クリーンなエネルギーである太陽光発電に大きな期待が寄せられているのです。

しかし、太陽光発電にもいろいろな課題があります。最も大きな課題はコストの高さです。1kWhの電気を作るのに、原子力発電は約5円、火力発電だと約7円かかりますが、太陽光発電の場合は40〜50円もかかります。少なくともこの3分の1にはコストを抑えられないと、普及は難しいでしょう。

コスト削減の鍵を握るのは設置費用です。太陽電池の重量は重く、屋根の上に載せるためには、太陽電池を支える架台が必要になります。また、屋根自体を補強しなければなら

ない場合もあり、設置工事の費用が積み重なってしまうのです。

そこで私たちは、太陽電池の軽量化に取り組んでいます。更に、曲げたり丸めたりも出来るようになれば、電柱のような丸い物にも太陽電池を取りつけることが出来、設置場所を選ばなくて済むため設置コストは更に抑えられます。これが実現すれば、太陽電池が普及する可能性が大きく広がるのです。

### 研究概要

## 「有機材料」を用いた デバイスの開発に 取り組む

私たちは軽量で曲げたり丸めたり出来る太陽電池の開発を「有機材料」を使って行っています。

有機材料は有機化合物を原料とする材料のことであり、有機化合物は、炭素原子を含んだ化合物のことです。炭素原子と他の原子との結合の仕方によって、さまざまな組み合わせの有機化合物を作ることが可能になるため、有機化学の分野ではさまざまな新しい有機材料が生み出されています。

有機には「生命機能を持った」と

いう意味があります。生き物の体は有機化合物で出来ており、その働きによって、私たちは体を動かしたり、光や音を感じ取ったりすることが出来ます。このように、有機化合物は多様で複雑な機能を持っているのです。

この有機化合物の可能性に着目し、電子工学の分野で有機材料を用いたデバイスの開発を行うというのが、私たちの研究です。有機太陽電池の開発も、研究内容の一つというわけです。

中でも私たちは、「有機薄膜太陽電池」といって、導電性高分子材料を用いた厚さ0.1ミクロン程度の太陽電池の開発に取り組んでいます。高分子材料は溶媒に溶かして溶液にすることも出来るので、将来的には、壁にペンキを塗るのと同じように、溶液になった太陽電池を壁や紙に塗れるようになるという可能性も秘めています。

もし部屋の壁紙を太陽電池に出来たら、生活はどうなると思いますか。蛍光灯の光を受けて電気を作ることが出来るようになり、その電気によってまた蛍光灯が光るといこう

に、究極のリサイクルが可能になるのです。夢のある話だと思いませんか。

他には、液晶の研究にも取り組んでいます。液晶の材料には有機化合物が使われているので、研究対象となるのです。液晶というと、多くの人はテレビやパソコンのディスプレイを思い浮かべるでしょう。しかし、その液晶は、数ある液晶の種類の中の一部に過ぎません。研究室では、いろいろな次世代液晶材料を使って、次世代ディスプレイの開発や、液晶レーザーなどのディスプレイ以外の分野で液晶を活用する方法を探っています。

### 研究のやりがい 未来の社会を 変える可能性を 秘めている

この研究に携わる面白さは、太陽電池の開発にしても、液晶の新しい応用の可能性を探る研究にしても、未来の社会を変える可能性があることです。また、私が研究している有機化合物は、生命を構成している物質でもあり、そこに無限の可能性を感じながら研究が出来るのも魅力の

一つです。おそらく、有機太陽電池が実用化されるまでには、あと15年から20年ぐらいはかかるかと思われます。企業の研究開発が数年後の製品化を目指しているのに対して、大学の研究開発はより長いスパンで物事を捉えて、将来的に必要なことであろう製品の研究開発が行われることとなります。

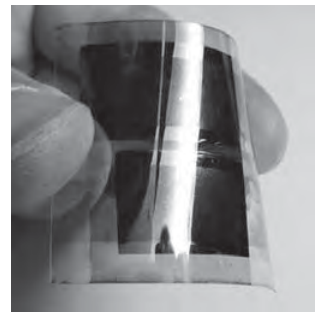


写真 プラスチックで出来た曲げられる太陽電池。印刷によって作ることが出来る

一つです。

実は私は、そこに大学で研究することの面白さがあると思っています。周りの人たちから「一体いつになったら実用化されるのか」とか「これは何の役に立つのだろうか」と思われるようなテーマに真剣に取り組む。その中から本当に未来の私たちの生活を変えてしまうような発見や発明が生まれる。それが研究の醍醐味なのです。

① 火力発電  
燃料を燃やして出来る熱を利用して水蒸気を発生させ、蒸気タービンを回転させて電力を作る。燃料には石油、石炭、天然ガスなどが使われるため、二酸化炭素が排出される。

② 導電性高分子  
電気伝導性を持つ高分子化合物のこと。実際の性質は導体というより半導体であり、柔らかい、しなやかといった高分子の性質を持つ半導体ともいえる。

③ テラヘルツ波  
周波数1THz(波長300μm)前後の電磁波のこと。光波と電波の中間領域に当たる。テラヘルツ光の周波数帯にはX線以上に多くの分子の振動に同期する振動数が存在するため、より多くのものを見ることが出来る。

#### 用語解説

## セキュリティ分野での液晶の活用を模索



熊谷孝幸さん  
Kumagai Takayuki

大阪大大学院工学研究科  
電気電子情報工学専攻博士課程後期1年  
(岩手県立釜石南高校(現釜石高校)卒業)

**Q** 現在の研究内容を教えてください

**A** 私の研究テーマは「テラヘルツ波」という電磁波です。

これは最近、盛んに研究され、宇宙観測などいろいろな分野での利用が模索されています。その一つがセキュリティ分野です。例えば、空港の保安検査場では乗客の手荷物をX線に通すことで、危険物が持ち込まれていないかをどうかを確認します。ただし、X線検査では、カバンの中に入っている物が液体だ

と分かったとしても、それがジュースなのか危険物なのかまでは特定できません。しかし、テラヘルツ波を用いれば液体や固体の中身まで見分けることが可能になるため、危険物や麻薬の探知に大いに貢献することが期待されています。

テラヘルツ波の弱点は、探知までに数分間かかる点です。そこで、私はテラヘルツ波に液晶を活用できないか研究しています。液晶は電磁波の特性を変化させることが出来る材料であり、液晶によってテラヘルツ波を制御することで、短時間で探知が可能になるのではないかと考え、研究しています。

研究はまだ基礎段階です。私が博士課程に在る間に実用化は出来なんでしょう。でも、「何を実現したくて研究をしているのか」というゴールが明確なので、日々、意欲的に研究に取り組んでいます。

**Q** 研究が思い通りに進まない時はどうしていますか

**A** 研究は、試行錯誤の連続です。壁にぶつかった時にはひ

たすら文献や学術誌の論文を読んでいます。論文を読んだからといっ

て、すぐにアイデアが浮かぶわけではありません。友人とご飯を食べている時も、風呂に入っている時も、いつも頭の片隅で「どうすればうまくいくのだろう」と考えています。すると、思わぬ場面でパッとアイデアがひらめくことがあります。その瞬間を逃さず、すぐにメモが出来るように、メモ帳とペンをいつも持ち歩くようにしています。

私の長所は「しつこさ」だと思います。実験でも「こんな結果が出たんだ」で終わらせず、「どうしてこういう結果になったんだろう」としつこいぐらいに考えます。たとえば、その理由が明確にならなくても、調べ尽くして得られた考察は、次の実験に必ずつながっていきます。

**Q** 高校生へのメッセージをお願いします

**A** 自分の高校時代を振り返ると、「もっと勉強しておけばよかった」とつくづく思います。勉強といっても、単に知識量を増やすことではなく、「考える訓練をする」ことです。例えば、数学で難しい問題に出合ったら、すぐに解答を見ず、まず自分の頭で考えて、答えを導き出してみようというのをずっとしておけばよかったと思います。

考えることは大変かもしれませんが、しかし、大学での研究活動は、知識も大切ですが、考える力があるかどうかが鍵となります。皆さんも今のうちから「考える訓練」を積み重ねておくと良いと思います。

### 私の高校時代

#### 卓球に明け暮れた日々 やり遂げたことが自信に

●高校時代の私は、卓球に明け暮れていました。高校の部活動だけでは物足りず、週に3、4日は社会人が参加する市の卓球クラブに通い、練習をしていました。家に帰るのはいつも夜の9時過ぎと遅く、疲れて勉強をする力も残っていないので、すぐに寝てしまうような日々でした。

卓球に打ち込んだのは、一度始めたこととはとことん突き詰めたからからです。卓球は見た目とは違い、腕の筋肉でなく、ひざと腰をしっかり使うことが求められるスポーツです。どうすればひざと腰を鍛えることが出来るのか、理想的なフォームはどういったものかといったことを追究し、練習を重ねるうちに、どんどんのめり込んでいきました。

残念ながら、大会では勝ち進むことは出来ませんでした。一つのことを最後までやり遂げた経験は、大きな自信になり、研究につながっています。

## 新課程移行期の 課題と実践

### — 大阪府立吹田東高校の事例から —

10月号に引き続き、新課程移行期ならではの共通の課題とその解決策を考える。  
今号では、幅広い学力層の生徒が入学しながらも各生徒の学力を上げ、  
生徒の希望進路を実現させている大阪府立吹田東高校の事例を基に、  
SIを軸とした指導の流れを検証する。

課程移行期のポイント	大阪府立吹田東高校の実践
<b>SIの見直し・再確認</b> *2011年2月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>「入学してきた生徒の力を伸ばす」というSIを確認し目線を合わせる</li> </ul>
<b>生徒の実態を精緻に把握</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>中学校の指導状況を知る</li> <li>高校入学時の生徒の状況把握を行う（高校入試分析など）</li> <li>面談などをこまめに行い、短いスパンで生徒の変化を把握する</li> </ul> *2011年6、9月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学生へのアンケート調査により生徒の実態を把握</li> <li>進路マップなどを活用し、学年の強み弱みといった観点から生徒を把握</li> <li>入学生へのアンケート、進路マップの結果を基に生徒と面談</li> </ul>
<b>カリキュラム・指導計画の見直し</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>現行課程の総括</li> <li>柔軟性のあるカリキュラムを策定</li> <li>枠組み（カリキュラム）だけでなく、中身（授業）を充実させる方法を検討</li> </ul> *2010年2月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>「進路指導研修会」を開き、教師全員で生徒を見取り、学年団で方針を固める</li> <li>成績中位層を中心とした授業を展開。上位層には実力養成講習を開講。下位層には定期考査前に指名補習を行い学力の底上げを図る</li> </ul>
<b>授業・指導の見直し</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>「量から質」への転換</li> <li>SIと生徒把握を基に授業をつくる</li> <li>削られる内容、増える内容を意識して授業をつくる</li> </ul> *2010年6月号特集など	<ul style="list-style-type: none"> <li>若手教師への研修会「GUTS」で授業力を養成</li> <li>少人数授業のクラス編成の工夫</li> <li>授業評価アンケートによる授業の見直し</li> </ul>

**課程の移行期に  
学校の力を付けるポイント**

課程の移行期に、生徒の気質の変化を感じる教師は多い。更に、今回の新課程では学力層の拡大が懸念されている。こうした時期だからこそ、SI（学校目標）に立

実践に対する評価（効果検証）

ち返り、取り組みを見直す視点が  
必要だ。  
次ページからは、SIを再確認  
した上で、この10年で生徒把握を  
緻密に行い、学力層に合わせた指  
導を充実させながら、生徒の希望  
進路の実現を果たしてきた大阪府  
立吹田東高校の事例を紹介する。

\*は関連する月号

大阪府立吹田東高校

# 入学時から 緻密な生徒把握で 全ての学力層を引き上げる

## S-Iを見直して 抜本的な改革に着手

大阪府立吹田東高校はこの10年間で大きな変貌を遂げた。改革前は関関同立（\*1）の合格者は5人程度、産近甲龍（\*2）の合格者は25人程度であったが、2011年度の合格者は産近甲龍が延べ85人、関関同立が延べ41人と大きく伸びた。

同校はかつて、生徒の容儀に乱れが見られ、遅刻も恒常的に多い学校だった。「自主自律」の下、生徒が希望した進路を教師がそのまま受け入れる傾向も強かったと

いう。石田孝男先生は「入学した生徒の能力を3年間で伸ばすことが出来ていませんでした。学校全体が『ぬるま湯状態』にあったと思います」と振り返る。

00年度に着任した校長が学校経営方針を大転換したのが、改革の始まりだった。「自主自律」のS-Iを見直し、「入学してきた生徒全員の力を卒業までに引き上げよう」という取り組みが始まった。金藤剛通先生は当時を次のように振り返る。

「本校は府内の中堅校であり、勉強が好きな生徒ばかりではありません。そうした生徒たちの学力

を上げるには、基本的な生活習慣の確立が欠かせないと考え、まず遅刻をなくして始業時間を厳守すること、頭髮や服装、あいさつなどの徹底的な生活指導を行いました。それらの指導は生徒の授業態度を良くする効果だけでなく、授業がしやすくなったことで、教師が授業準備を入念に行うようになるという効果も生みました」

しかし、改革がすんなりと成果に結び付いたわけではなかった。生活指導・学習指導に厳しいというイメージが裏目に出て、5年程前には一度、定員割れをした。しかし、教師たちは悩みながらも、「手を掛けて生徒の力を伸ばす」ことが自校のS-Iであると再確認し、改革の手を緩めることはしなかった。

## 綿密な生徒把握で 変化に応じた対策を打つ

生徒を伸ばすには、まず目の前の生徒を正確に見取り、その成長を継続的に把握する必要がある。そこで、4月には新入生全員を対



大阪府立吹田東高校教頭  
**今井洋子**  
Imai Yoko  
教職歴27年。同校に赴任して1年目。



大阪府立吹田東高校  
**小野茂喜**  
Ono Shigeaki  
教職歴28年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。



大阪府立吹田東高校  
**石田孝男**  
Ishida Takao  
教職歴41年。同校に赴任して10年目。



大阪府立吹田東高校  
**金藤剛通**  
Kanatani Takemichi  
教職歴35年。同校に赴任して11年目。

### 大阪府立吹田東高校

◎大阪府北部の千里丘陵に1974（昭和49）年開校。シラバスや授業評価、学校協議会制度などを府内でもいち早く導入してきた。  
◎全日制／普通科／共学／1学年約360人  
◎2011年度の合格実績（現浪計）◎国公立大は信州大などに2人が合格。私立大は関西大、関西学院大、同志社大、立命館大、京都産業大、近畿大、甲南大、龍谷大に延べ126人が合格。

象にアンケートを実施し、「本校は第1志望か」「通っていた塾はどこか」などを尋ねている（P.40図）。小野茂喜先生はその理由を次のように話す。

\*1 関西大、関西学院大、同志社大、立命館大の呼称

\*2 京都産業大、近畿大、甲南大、龍谷大の呼称

「本校が第1志望かどうかは重要な情報です。第1志望であれば生徒も保護者も意欲は高いですが、そうでなければ学校生活に対して前向きになれる可能性がありません。そうした生徒には一層の気配りが必要です」

担任はこのアンケートを見ながら、入学直後に生徒全員と面談を行う。第1志望の生徒には入学しただけで満足してしまわないように、そうではない生徒には学校での目標や居場所を早く見つけられるように声を掛ける。6月には三者面談、11月には二者面談を行い、生徒の状況を把握する。

更に、進路マップなどを活用したデータに基づく生徒把握も実施した。過去6年分のデータ結果を基に分析し、5、11月の年2回、教師全員が参加する「進路指導研修会」で報告して、全校で共有している。

「学年と個々の生徒の強み・弱みを洗い出せば、担任は自信を持って指導できます。面談でも『A大に行きたいなら数学を頑張ってください』3教科でBゾーン（\*3）以上を

目指そう」と、データに基づいて具体的に助言しています」（金藤先生）

### 授業評価を通して 中位層を伸ばす授業を実現

同校が最も力を入れるのは、生徒の大半を占める成績中位層の指導だ。

「本校は生徒の学力も志望進路の幅も広いため、カリキュラムも授業も中位層を伸ばすという観点で編成しています」（金藤先生）

更に、中位層の生徒は自分に自信を持ちにくく、高い志望を抱きにくい。先輩の例などを引き合いに出しながら、「自分たちも難関大に行ける」という雰囲気を高めていく指導が大切なのだ。

また、生徒が授業をどのように受け止めているかを把握するため、授業評価を年2回実施する。

「中位層の生徒にはどうしても目が行きづらいものです。そのため、授業評価は有効だと感じています。私は教師になって40年以上経ちますが、授業評価で生徒から

#### 図 2011年度 生活進路実態調査(1年生用)の質問項目

- 問1. 吹田東高校が第1希望でしたか。 はい・いいえ  
「はい」と答えた人は、第1希望の高校名を教えてください。( ) 高校
- 問2. 本校を希望した理由を教えてください。( )
- 問3. 吹田東高校はどのような学校だとまわりの人から聞いていましたか。( )
- 問4. 高校入試に備え、塾に行っていましたか。 はい・いいえ  
「はい」と答えた人は、塾の名前を教えてください。( ) 塾 ( ) 校
- 問5. 本校のオープンキャンパス見学会、学校説明会で来校しましたか。  
はい・いいえ  
「はい」と答えた人は、来校した時期にマルをしてください。  
8月・11月・2月・3月  
「はい」と答えた人は、その時にどのような印象を持ちましたか。( )
- 問6. あなたの得意科目と苦手科目は何ですか。  
得意 ( ) 苦手 ( )
- 問7. あなたの学力は総合して中学校でどのレベルだったと思いますか。  
あてはまるものにマルをしてください。上位・中の上・中・中の下
- 問8. 高校卒業後の進路希望はありますか。  
四年制大学・短期大学・専門学校・就職・未定 その他 ( )  
進路先を具体的に考えている人は書いてください。  
(例)\*\*大学、\*\*専門学校、\*\*会社 ( )
- 問9. 高校生活に何を期待しますか。( )
- 問10. 高校に入学して何か不安はありますか。 ある・ない  
「ある」と答えた人は、具体的に書いてください。( )

\*学校資料を基に編集部で作成

改善してほしいと指摘されたことの中には、自分が今まで考えつかなかったこともあり、改めて、生徒の目線に立つ重要性に気付かされました」（石田先生）

授業評価の結果は教科会で共有し、学年としての方針や課題について再度、目標設定を行う。組織として授業改善に取り組んでいるのだ。

成績上位層と下位層に対しては、授業外での支援を充実させ

た。上位層には、放課後や土曜日に自由参加の実力養成講習を開講。下位層には、生徒を指名し、定期考査前の2週間分の土曜日を使って補習を行う。

「以前は補習に指名されることを嫌がる生徒もいましたが、今はほとんどいません。指名されなかったのに出席したいと申し出る生徒がいるほど、学習に対して意欲的な姿勢が見られるようになりました」（小野先生）

\*3 「学習到達ゾーン」で、中堅私立大の合格可能性が出てくるレベルのこと

上位層、下位層の補習の他に、1・2年生には毎週火曜1時間目に小テストを実施し、合格点に到達しなかった生徒を放課後に残して、指導している。

「小テストを週明けの火曜日の1時間目に設定したのは、週末の家庭学習を教師がコントロールする狙いもあります。小さな取り組みの積み重ねが生徒の学力を保証するのだと信じています」（小野先生）

## 若手教師を育て 授業力を向上する

かつて教師として同校に勤務し、11年度に7年ぶりに再赴任した今井洋子教頭は、職員室の変化に驚いたと話す。

「職員室の雰囲気明るくなっていると感じました。以前は教科ごとに準備室があり、そこに個々の机があったため、学年団で集まることもままならない状態でした」

教師全員が集まる職員室を設けたことが一つの転換点となった。小野先生は「本校に赴任した

時、休み時間や空き時間に教師が集まって、生徒の個人名を挙げて話をしていることに驚きました」と語る。就業時間以外でも教師たちが集まって胸襟を開いて話す機会が増えたそうだ。

こうした学校の雰囲気があるからこそ、学年で効果があった取り組みを学校全体に広げやすい。例えば、2年生の中だるみ防止のために外部講師を招き進路講演会を開くなどの取り組みをしたところ、例年と比べ学力の推移に変化が見られた。指導の軸は守りつつも、学年独自の工夫を重ね、成果の検証を行った上で次の学年に引き継いでいく。こうしたPDCAサイクルを組織的に回していることが同校の強みになっている。

一方、3年前から「GUTS（ガッツ）」という若手教師塾を開き、教師の指導力向上にも力を入れる。現在の塾長は小野先生で、メンバーは新任の23歳から30代前半まで、非常勤講師を含めた10人だ。授業力向上の取り組みとして、小野先生の授業を参観した後、小野先生がメンバーの授業を

見てアドバイスをする。その他に、毎回の研修会では進路指導や学級経営などのテーマを設定し、二つの班に分かれて討議、話し合った内容を発表する。同校で過去にあった課題をケーススタディーとして取り上げることもある。新課程の全面实施や団塊世代の大量退職を控え、授業力を中心とした若手教師の指導力の育成が急務であると感じているという。

## 新課程移行後は入学生を 更に注意深く把握する

変化する生徒の実態を常に把握し、それに応じて柔軟に対応していく姿勢は、新課程移行期ではこれまで以上に重要となる。中学校段階の学習内容が増えたために、高校入学段階での生徒の学力差がますます広がるのが懸念されるからだ。

金藤先生は「気を緩めると、元の状態に戻ってしまうのではないかと。少しでも努力を怠ると、また定員割れをするのではないかと話した危機感があります」と話

す。そこで、新課程移行期には更に入学者の学力変化を綿密に把握し、細かに対応したいという。例えば、現在は1年生の英語と数学で1クラスを2分割した少人数の授業を実践しているが、年度途中での学力に応じた入れ替え制を導入するなど、生徒の実態に応じた運用を検討する予定だ。

「変化に対応しなければいけない新課程移行期だからこそ、これまで本校が大切にしてきた生徒の丁寧な把握を軸にした指導が重要になると思います」（小野先生）

「現状を維持するだけでは後退だと思っています。今までの努力が更に実を結ぶよう、新課程を契機に学校の改善を図っていきたいと考えています」（今井教頭）

同校の入学生の学力層はほとんど変わっていないにもかかわらず、大学合格実績は堅調に推移している。これは、入学生の学力を3年間で伸ばしている証しといえるだろう。今後も生徒がどのように変化していくのか、注意深く把握し、常に対応を改善しながら、生徒を伸ばしていく考えだ。

学生が伸びる学び方

## 大学選択

## 新たな視点



### 今号の視点

# 初年次に将来の見通しを示し 学ぶ意欲を引き出す大学・学部

大学に入学してくるのは、学びたいことが明確な学生ばかりではない。

入学後に改めて、その学部で何を学べるのか、そのためにはどのように履修したらよいかを伝え、初年次の段階で4年間の学びの見通しを示すことにより、将来に向けた目的意識を育む二つの大学を紹介する。

### 初年次教育で 目的意識を醸成

自分の学びたい学問によって大学・学部・学科を選ぶ生徒は多いが、入学したばかりの学生が、学問内容を十分に理解した上で履修すべき科目を選択するのは容易ではない。科目ごとのつながりをあまり理解しないまま、単位の取りやすさなどを優先して、易きに流れてしまう恐れもある。

一方、第1志望大に合格できず、併願先に進学した学生の場合、学

びの目的意識自体が希薄なケースもある。中には、「とにかく国公立大」「A大ならどの学部・学科でもいい」といった学生もいるのが現状だ。

「その学部・学科で何が学べるか」「4年間でどのように学んでいくのか」「カリキュラムはどのような意図で組まれているか」を、入学後の早い段階で学生に伝えることは、どの学生にも必要性の高いことと言える。文部科学省の調査によると、84・4%の大学が初年次教育を実施しており、その76%が「学問や大学教育全般に対する動機・

方向付け関連」の取り組みを行っている(図1)。今回は、初年次教育を通して学びの内容や将来の見通しを示し、学生の意欲を引き出すことに成功した事例を紹介する。

### 学びの方向性と 学び方をセットで示す

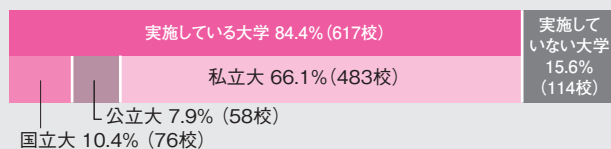
山形大  
スタートアップセミナー

#### ◎課題意識と狙い

山形大は2010年度、教養教育改革を行った。その背景は主に二つある。

一つは、「とにかく国立大」とい

図1 初年次教育の実施状況



#### ◎初年次教育の具体的な取り組みの上位3つ

- ・レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム (約86%)
- ・プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム (約79%)
- ・学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラム (約76%)

\*2009年度時点 \*大学院大学は対象としない

出典/文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

う意識が強く、学部・学科にこだわらずに入学してくる学生が少なくないことになった。人文学部の立松潔教授は次のように話す。

「学びたいことが明確な学生もいますが、センター試験の結果を見て出願先の学部・学科を学内で変えたという学生もいます。極端な例ですが、第1志望は人文学部だったのが、センター試験後、理系の学科に変更した学生がいたと聞きました。学部・学科のことを深く知らずに入学する学生が現実にいるのです。学生が専門教育に意欲的に臨んで学びを充実させるために、問題意識を早めにしたせることが必要なのです」

二つめは、教養教育の授業において、教員は教えたいことだけを教え、学生は履修すべき科目を履修していない状況にあった点だ。学生に共通して学ばせるべき内容は何かを再検討する必要があった。

### ◎取り組み内容

教養教育の新しいカリキュラムでは、1年次の前期に必修科目として「スタートアップセミナー」を新設した。目的は、大学4年間の学びの目的意識を醸成すること、レポート

の書き方やグループワークの進め方など、大学での学びに必要な基礎技能を身に付けさせることだ。そのために、全学部共通の学生用テキスト『なせば成る！』と、教員用指導マニュアル『なさねば成らぬ！』を作成。授業内容は学部・学科の状況に合わせて設定することにした。

「スタートアップセミナー」を活用して、学生の目的意識を醸成しているのが、工学部システム創成工学科だ。国立大初のフレックスコース（\*1）として10年度に誕生した同学科は、工学部が開講する全ての科目を履修できるのが大きな特徴だ。2年次からは、他学科の中から興味のある分野を選んで専攻する。古川英光准教授は次のように話す。

「入学時点で目的意識が明確な学生も1〜2割程度はいます。しかし、2年次から分野を選択できるとはいっても、実際に学生が考え、明確な意図を持ってコースを選べるかという疑問がありました。そこで『スタートアップセミナー』を利用して、学びの動機付けや将来のキャリア意識を高めていこうと考えました」

授業では、社会の第一線で活躍する企業人の講演後、学生6〜7人が一つのグループになり、ディスカッションしながら講演者の仕事内容、仕事の魅力などをまとめ、グループごとに発表する。これをその後の専攻につながる3分野について計3回行う。

古川准教授は、「それまで関心がなかった分野でもきちんと向き合わせることで、学生の視野を広げることが狙いです」と説明する。システム創成工学科2年の鈴木沙耶さんは、「私は機械と化学の両方に関心があり、そのどちらも学べるこの学科を選びました。『スタートアップセミナー』を通して、更に興味の幅が広がりました」と話す。

発表には他学科の教員も参加し、「電気電子工学科ではその内容は勉強できない」「それなら情報より物質を勉強した方が良い」とアドバイスをもらう。そして、総仕上げとして、学生一人ひとりが自分のロールモデルをまとめる（図2）。

1年次の後期は「キャリアパスセミナー」が必修科目となる。ここで全分野の研究室を見学し、12月の専

図2 山形大 ロールモデルづくりで使うワークシート

ロールモデル	名前
どんな仕事？	そのために、学生時代に何をすべきか？
仕事の魅力は？	何故そう言えるのか？
前提：このロールモデルを真似したいのか？	
どんな能力・姿勢・志望・考え方が必要？	履修計画 その他の活動メニュー
何故、そう言えるのか？	何故そう言えるのか？
	目標に向けての誓い

\*同大学の資料をそのまま掲載（ワークシートは志村勉教授の作成）

攻選択で専攻分野を決定するが、定員は設けておらず、学生は選んだ分野を必ず学べるようになっている。

### ◎成果と課題

全学で実施した学生アンケートの結果では、「自分が所属する学部・学科への理解を深めることが出来ましたか」の問いに、10年度は64.3%、11年度は74.0%が肯定的な回答をした。また、システム創成工学科では「スタートアップセミナー」を通して将来の目標と学ぶ内容を明確に結び付けられるため、意欲的に学ぶ姿がよく見られるように

\*1 昼夜間開講のコース

なったという。

「今後の課題は、各学部・学科の工夫を互いに共有することです。10年度には教員研修でいくつかの学部に取り組みを発表してもらいましたが、そうした場を今後も設けていく予定です」（立松教授）

## ガイダンスと必修科目で 学びの道筋を明確に示す

青山学院大経済学部  
現代経済デザイン学科

### ◎課題意識と狙い

青山学院大経済学部の現代経済デザイン学科は、08年度に新設された学科だ。「公共性の考えに基づいた新しい社会経済システムを提案できる人材」の育成を掲げているが、新学科のため、学びの内容が受験生に伝わりにくいという課題があった。初年時に新入生対象に行ったアンケートでは、指定校推薦入試での合格者は学科内容を理解していたが、学内併願やセンター試験利用方式での入学者の中には学科の内容をほとんど調べていないケースもあった。実際、3年の岩谷浩平さんは「MARCH（\*2）以上の大学に入学し

たいと考えてセンター試験利用方式で出願しました。この学科にこだわりはありませんでした」と率直に語る。このような状況のため、早い段階で学科の内容を伝え、学びの目的意識を高めることが必須であった。

### ◎取り組み内容

同学科では、ガイダンスを繰り返し行い、学生を支援する。1年次には、4月に履修ガイダンス、5月に修学オリエンテーション、12月にコース登録ガイダンスを開き、ここで何を学べるのか、現時点での学びはカリキュラムのどの位置にあるのかを、その都度伝える。毎回、学科専任の教員約10人全員で説明するものが基本で、壇上から話すだけでなく、学生の中に入って個別に相談に応じる。3年の稲垣有弥さんは、「ガイダンスが他学科より多く、同じ内容を何度も説明されました。そのおかげで、入学前は学科で何を学ぶのか漠然としていましたが、少しずつはつきりしていきまし」と話す。1年次前期の必修科目「総合講義」も学科の内容を伝える場だ。専任教員10人が1回ずつリレー方式で自分の専門分野を講義する。

1年次前期には週2回の講義と週1回の演習で「ミクロ経済学」を集中的に教える。宮原勝一教授は「この内容は1年生にとって難しいものですが、本学科の学びの基礎になるのであえて設置しました。本学科のカリキュラムは、ゼミを中心に設定しています。3年次からゼミで学ぶために必要な科目を1・2年次に配置しているため、1年次から必修科目が多いのが特徴です。目的までの道筋を示すと共に、学生が4年間の学びを振り返った時に『自分はこれを勉強した』と言えるようになってもらうためです」と説明する（図3）。

学生は学年が上がるにつれて、ミクロ経済学を1年次で学んだメリットを実感するようだ。岩谷さんは、「他の講義を受けていて、ミクロ経済学で学んだ内容とつながっていると感じることがよくあります。1年次に自由に科目を選択していいと言われても何を学べばいいかわかりません。後につながる科目が必修と

図3 青山学院大 現代経済デザイン学科の4年間の学び



4年間の学びの流れ。2年次後期に2コースに分かれるが、コースが3年次のゼミに直結する流れをつくっている \*同大学の資料を基に編集部で作成

なっていて良かったと思います」と話す。教員間での指導内容の連携も図る。例えば、1年次前期の「ミクロ経済学」は1年次後期の「公共経済学」「地域経済学」と内容が関連するため、教員によって説明方法が異なると混乱する学生が出てくる。そこで、何をどう説明したかなどを教員間で情報共有している。

\*2 明治大 (M)、青山学院大 (A)、立教大 (R)、中央大 (C)、法政大 (H) の呼称

漠然としていた学びの道筋が  
明確になっていった



山形大工学部システム創成工  
学科バイオ化学工学コース2  
年  
**若林 雅貴**  
(山形県立寒河江高校卒業)

私は、センター試験後に高校の先生からシステム創成工学科を紹介されて初めて知り、出願を決めました。「山形大に行きたい」と思っていたものの、入学当初、何を専攻したいかはっきりしていなかったため、「スタートアップセミナー」は大いに役立ちました。特に、グループ学習ではメンバーに機械が好きな人もいれば化学が得意な人もいて、自分がそれほど興味がなかった分野の話聞くことが出来ました。これが私にとって大きな刺激となりました。

ロールモデルを考えていた時に、バイオテクノロジーでがん治療をする記事をインターネットで見つけました。これをきっかけに、将来はバイオテクノロジーを使う医療関連の研究をしたいと思うようになりました。専攻分野はバイオ化学工学分野か物質化学工学分野かで迷いました。この二つの内容は似ているからです。「キャリアパスセミナー」で、バイオの研究室が再生医療の研究をしていることを知り、これが自分のやりたいことだと思ってバイオ化学工学を専攻に選びました。

1年次の基礎固めが  
3年次の今の土台となった



青山学院大経済学部現代経済  
デザイン学科公共コース3年  
**坂本 春菜**  
(東京都立白鷗高校卒業)

私は指定校推薦入試で現代経済デザイン学科に入学しました。公共や地域について幅広く学べるだけでなく、多くの必修科目で基礎を磨けることが将来に役立つと思ったからです。

実際、学内の他学部比べて必修科目が多く、他に受けたい授業があっても選べない面もありました。しかし、1年次から基礎をしっかりと身に付けた結果、3年生の今、どの科目を取ってもスムーズに学習できていると実感しています。特に1年次の前期に週3コマあった「ミクロ経済学」は、それ以降のいろいろな科目と関連があり、しっかり勉強しておいて良かったです。

年に何度も開かれるガイダンスは、先生が一方的に話すだけではありませんでした。いくつもの小さいテーブルを学生が囲み、先生がテーブルを回って話しに来てくれました。そこで勉強のことやコース選択のことなどを直接相談できたのが良かったと思います。ガイダンスでの先輩のアドバイスも、コース選びやゼミ選びの参考になりました。

◎ 成果と課題

学生アンケートの結果、学年が上がるにつれて意欲や自主性、適応力といった項目の回答が向上する傾向が見られるなど、取り組みの成果が表れ始めている。稲垣さんは、「大学でこれほど教授と接する機会が多いとは思いませんでした。ゼミ選びに向けて、学問内容だけでなく先生の人柄も分かって良かったです」と話す。

課題は、ガイダンスなどに出席しない学生をどう学びに引き込むかだ。今後、インターネットの活用を含めて、働き掛けを工夫していく考えだ。

進路指導に生かす

1・2年次の科目履修の  
考え方をチェック

従来の大学教育は、学生が学びたいものを自由に選ばせるという、学生の自主性に任せる形が一般的だった。山形大の学生アンケートでも、自由に選択できる科目の方が必修科目より満足度が高い傾向があるという。

しかし、大学が用意した科目から

学生が好きなものを選んでいくだけでは、自分が何を学んできたのか卒業時に体系的に語れないことも多い。逆に、履修歴に筋が通っていれば、自分が何を学んできたかをアピールできるだろう。「あのゼミに入るのであれば、この科目が役立つ」「将来の学びのあの部分につながるから、今、これを勉強している」という見通しやカリキュラムの意図を大学が示すかどうかで、学生の意欲が大きく左右されるはずだ。

こうした取り組みの確認ポイントは、大学がどのような考えで1・2年次の教養・基礎科目を履修させているかにある。単なる履修登録のためのガイダンスだけでなく、今回の2大学のような取り組みがあるかを確認するのは有効だ。カリキュラムが整っていることを前提として、4年間の学びをどう意識させるのか、学生にどんな働き掛けをしているのかを見ておく必要があるだろう。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎ 今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail:

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

### 社会に対する問題意識を持たせたい

教科の特性もあるので一概には言えないが、9月号の特集にあった「理科離れ」や「現代文の入試問題に要求される社会に対する問題意識」などに共感した。今、私は1年生の担任で、熱量計算などで苦労している生徒を間近で見ている。定期考査が終わって感じるのは、その苦勞の度合いが以前より増しているのではないかとことだ。社会に対する問題意識も、意識そのものを持って生徒が少ないようだ。小論文指導も含め、教師が意識して授業で扱う必要を感じている。

〔秋田県・匿名希望〕

### 校内で「小さな改革」を行う決意を持った

9月号「指導変革の軌跡」の北海道函館校北高校のKJ法の活用とユニット制導入により、学校組織の活性化を図る取り組みに心が引かれた。学校にはソフト・ハード共に「捨てられないもの」がたくさんある。往年の備品や積年のファイルとの「断捨離」以上に、「学校の流れ」を変化させることがより困難だからだ。同校の成果はうらやましい限りだが、変革の手段をただまねするだけではうまくいかないと思う。改善に向けての「スピード」感の重視と、教師集団の織りなす「綾」を意識しつつ、勤務校での「小さな変革」を志そうと感じた。〔宮崎県立延岡星雲高校・柳井健二〕

### 目立たない「中間層」をどう育てるかが鍵

2年生の2学期の過ごし方は、その先の1年に大きな影響がある。そのためにも、データを活用しながら指導していきたい。また、中間層に焦点を当てるのは大変良いと思う。ただ、中

## VIEW'S SQUARE

Volume 4

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

中間層の生徒は、これといった得意科目や不得意科目があるわけではないので、課題のある生徒としてあまり表に出てこない。文武両道を目指す生徒から、目標が見当たらずとあえぎ学校に通う生徒まで、さまざまな生徒がいるので、生徒の実態に合わせて指導する必要がある。指導を間違えないように、いろいろな教師からの情報とデータを基に指導していきたい。

〔東京都・私立東京農業大学第一高校・小堀健一〕

### 学問分野と社会のつながりが分かるコーナー

9月号「未来をつくる大学の研究室」の内容が大変興味深く、ぜひ生徒にも伝えたいと思った。このコーナーは、生徒の進路選択に役立つ記事が載せてあり、『VIEW21』の中でも特に好きである。自分自身の過去を振り返るとそうであったが、生徒は漠然とした興味で進学先を選んでしまうことがある。自分の興味のある分野が社会とどのようにかかわり、社会にどういった形で貢献しているのかを知った上での進路選択が理想である。そういった意味でこのコーナーは教師にも生徒にもとても役に立つ。ぜひ今後は拡大して多くの分野について取り上げてほしい。

〔茨城県・匿名希望〕

教師川柳

天気図とにらめっこして行事組む

兵庫県・匿名希望

## 『VIEW21』臨時増刊号 「グローバル人材を育成する」 発刊のお知らせ

3月上旬頃に発刊予定です

\*タイトルは変更する可能性があります



\*写真は、2010年度臨時増刊号  
Vol.1、Vol.2の表紙です

### 編集後記

今号は特集で初めて高校間連携をテーマにしました。先生方が志を同じくして歩みを進めることで、学校単体だけでなく地域や日本全体の教育を底上げしているのだと改めて感じました。私たちは誌面を通して、先生と先生、学校と学校がつながるお手伝いをしてきましたが、これからも全国の先生方の熱い思いをつなげる『VIEW21』であり続けたいと強く思います。特集を組むに当たり、多くの先生にご相談いたしました。この場を借りて、心から感謝を申し上げます。(佐藤)

VIEW21 12月号 Vol.5

2011年11月25日発行

発行人 新井健一  
編集人 原茂  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター  
印刷製本 (株)ビーヴィオコーポレーション  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 二宮良太、長谷川敦、山口慎治  
撮影協力 坂井公秋、南弘幸、ヤマガチイキ  
イラスト協力 山本重也

VIEW21編集部  
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階  
電話 03-5320-1287

©Benesse Corporation 2011

VIEW21

2012  
February  
2月  
Volume 6

次号は  
2月8日発行(予定)  
『VIEW21』高校版は  
年6回の発行です